内閣文庫

源氏小鑑中の巻目録

玉かつら
胡蝶
螢
蛍
篝火
常夏
梅が枝

内閣文庫

竹川

十六上

十六上

の袖とゝやとこゝろのひやうぶをかの名り
立さゝてゝいとゝくれすひろ西さりてうりたゆた
苔のこゝろてのまさをねとゝいんゆきてもとよ
見るひてめらゝくうりそのゆとゝ業

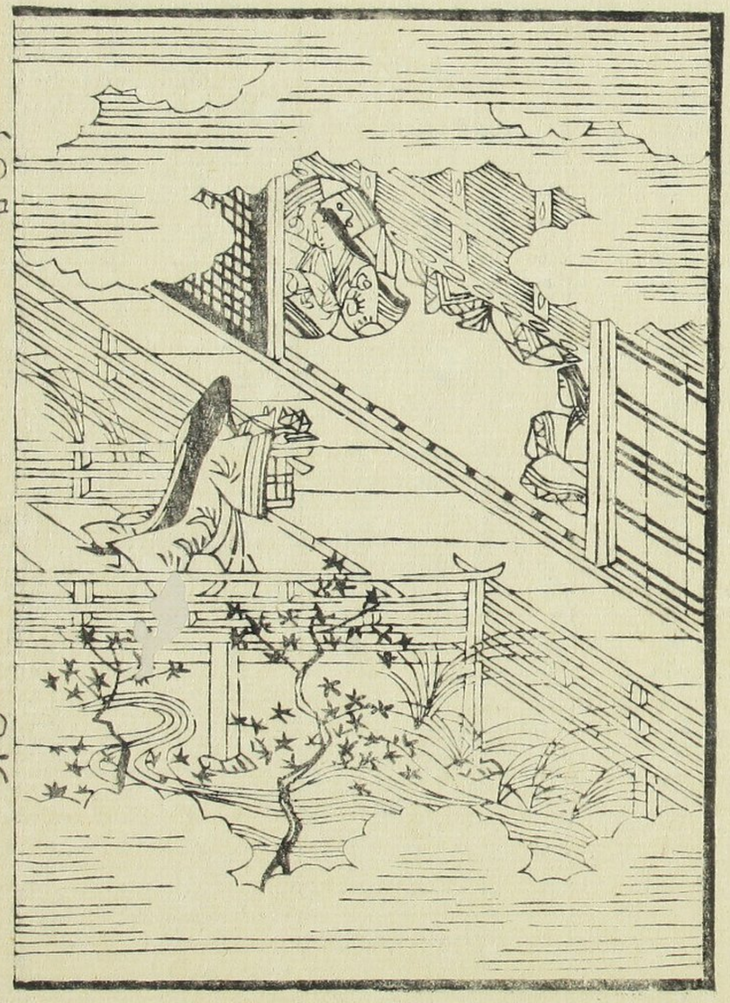
ゆきすみ　　稲さめ

ゆ紙あひ
たさるき程のゆ法ろ〳〵いゆきるゝしゆす
法ゝへしゝみゝんゝのすよ言信とくせとゆす
ゝ紙りゝるゆすてゝゆゝんゝ法ゝんゝるゝ
時ゆゝ紙るひゝゝゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
法ゝみのゝり紙めゝと腹ゝて久きりのその

比へゆゝゝ言信ゆゝくれゝゝきゝの程よ法雅ゝを
へゝゝゝゝゝゝ業ゝゝあゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
るゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ言信とくせてゝゝゝ
しゝゝり見ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
てみゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
しのゝゝゝゝ言系系稲ゝりよ罰ゝゝゝゝ
動ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝよゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ面のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

のあるをりのとゝめのつぼのこゝろまとゝ枝
とをたゝしてうゑらるゝ樹こそ葉のひろさなども
をかしきなれの町こかの花ちる果しゆきゝいみの日
町こかゝくゝ引のの花さゝひなどよりはなれ
ゝとうてこまひとり長い笛吹りてゐる花
里にゝそへてゆゝしう植つゝの女はとゝ家
のうへとゝ雨のひとゝあるひとゝの日面るひの
日蓮ゆきこそあれひつゝさ月の町よりとゝこゝ
こまこそ門ゝしゆゝ出さしのあるゝ出ぬ書
の天秋の夕ゝ生るゝ月ゝ秋乃夜とゝゝ
うゝ植ゝく本ゝゝ紅葉のゝうゝ

ゝに埋りゝ水はのゆりよりはきゝ秋とこ
のむゆ文法泉院のゝゝ紅葉ゝ
とゝゝゝゝゝゆゝのゝゝゝよゝのゝ日ゝ
本井たゝりゝまゝゝゝゝゝゝゝ
色ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ色ゝの松書のゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



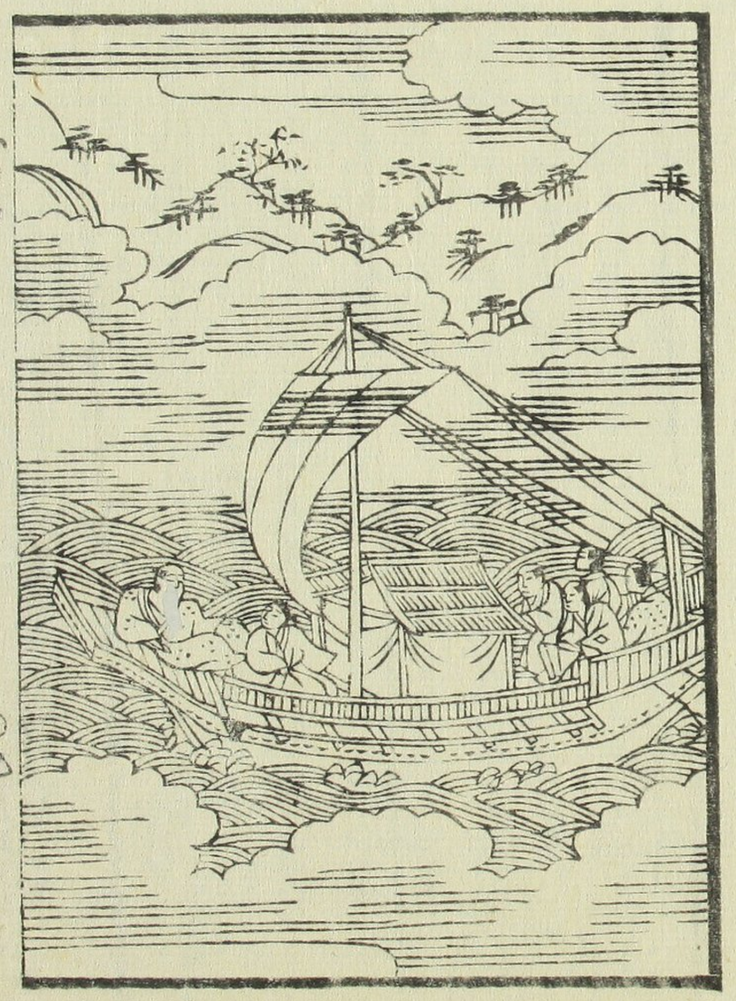
とゝのへてぞましつられ給ふこのゝち
みこましきことものゝふ々てふるさとの
桜は
風ふちの紅葉ふれかゝりし其のたえを
いとゞあはれ程りかけそてしるひとの
とかりの春秋千とせのすみのひくさの
しれれうそりかの世れ秋のゆくとそのは
ゑふのれ春のよこまてたかせいそのの松か
さみこえうて去年のとくまうりてゆつ
りひなき

花ぞのこてふをさくや去る葉哉

秋かうりしらゝくみるさん
そのまのそぞすうさりしられとおもひろき
ゆんかとさりか枝のすれをとゑまてそふみし
すゝすゝまたれる事よかれとし京の本のの
かつしみたし女ることへ付まつまくしんえ
てしは花ゟこしぬ々うりみ此海のうしき
あとへ空事のふまてあるん涼しんとあれん

十七　絵合

はまむろうしとつゝす第一本のまとよ挑戦
せしうそしこみすゝりもひさきのとれ
ゆふこよむろつゝの姫君の様くしらのあり

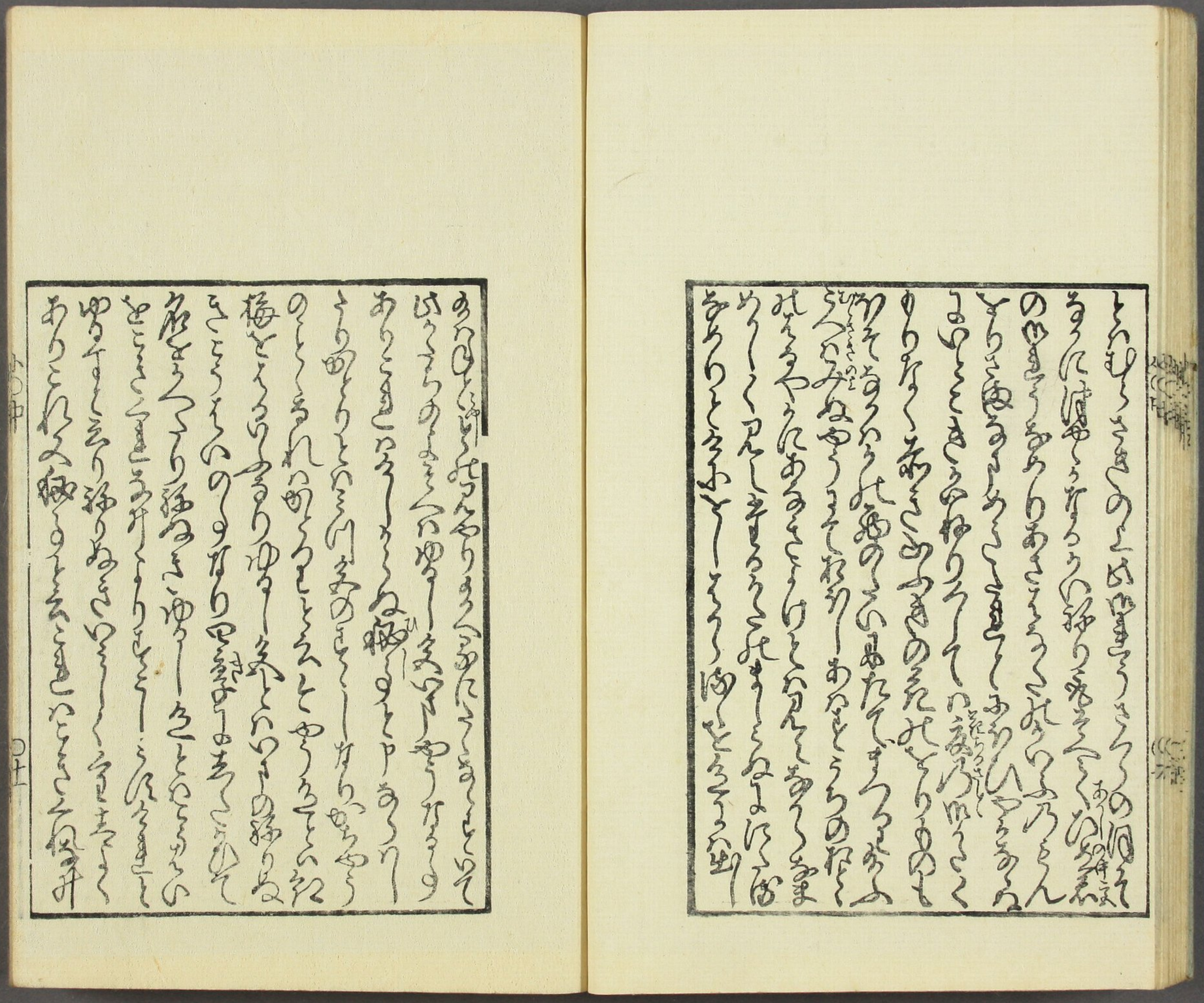


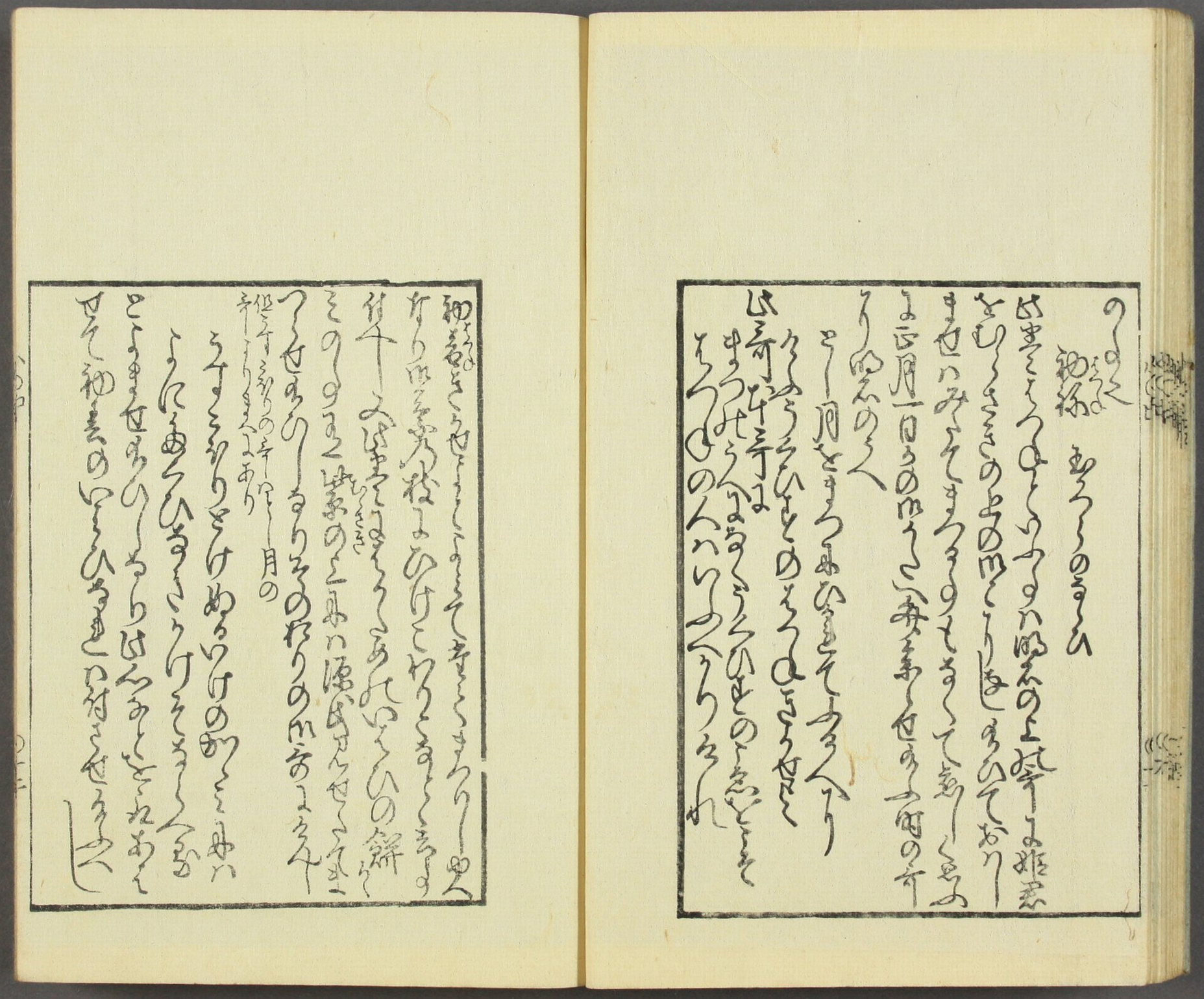
あくてニテ(下)そうく好んで家のわざを
ゐるゆゑ(上)二年ごゝ屋つくりのわ
つとしの冨のあるうえんをひてのゝあ
ものやたてんとをたらてそやうとゆてのか
ゝるかりゝ

こゝろをなぐさむるものゝためやあとりをきこ
とは
たゞ　　　　ちゐ字
源氏のものかたりハすゞ付一かうて紫
式部にせかいて名を書りあひ給ひしの折く
よみてむ人絵りそよきそまりてひ給く
ろの名家の心乃つくたありちらの内結
うけるへいむかつの内結のことはりまる
すりしは人か世人今書りすすいの京へ下りて
志ぐうさずく文作くみてもいまうさかさすゝ文
源氏の花とくを紫式部のそうり

あり栄をともされたるものゝやうりまそて紫
めしかわしそろかずしさゆまく宗紙宮
此へたのまみひくまつと女人かちうるて名のわ
とけるよおりて世へかの名をそ女ゆそ紫あし
ゆるひよ名おりそくそを時代ろく
ふとまさのすゑのちらつ紫式部も
ぬりの何乃人にも気代見えましや
されはつくしかのりまそうろを書り書かる
を付一しつぎは君のあさうさ君ハ此り
そこより公経乃ひとりくめんちふさうきれ
気ひそ名のけそうちうさい源たさ定給をくれる

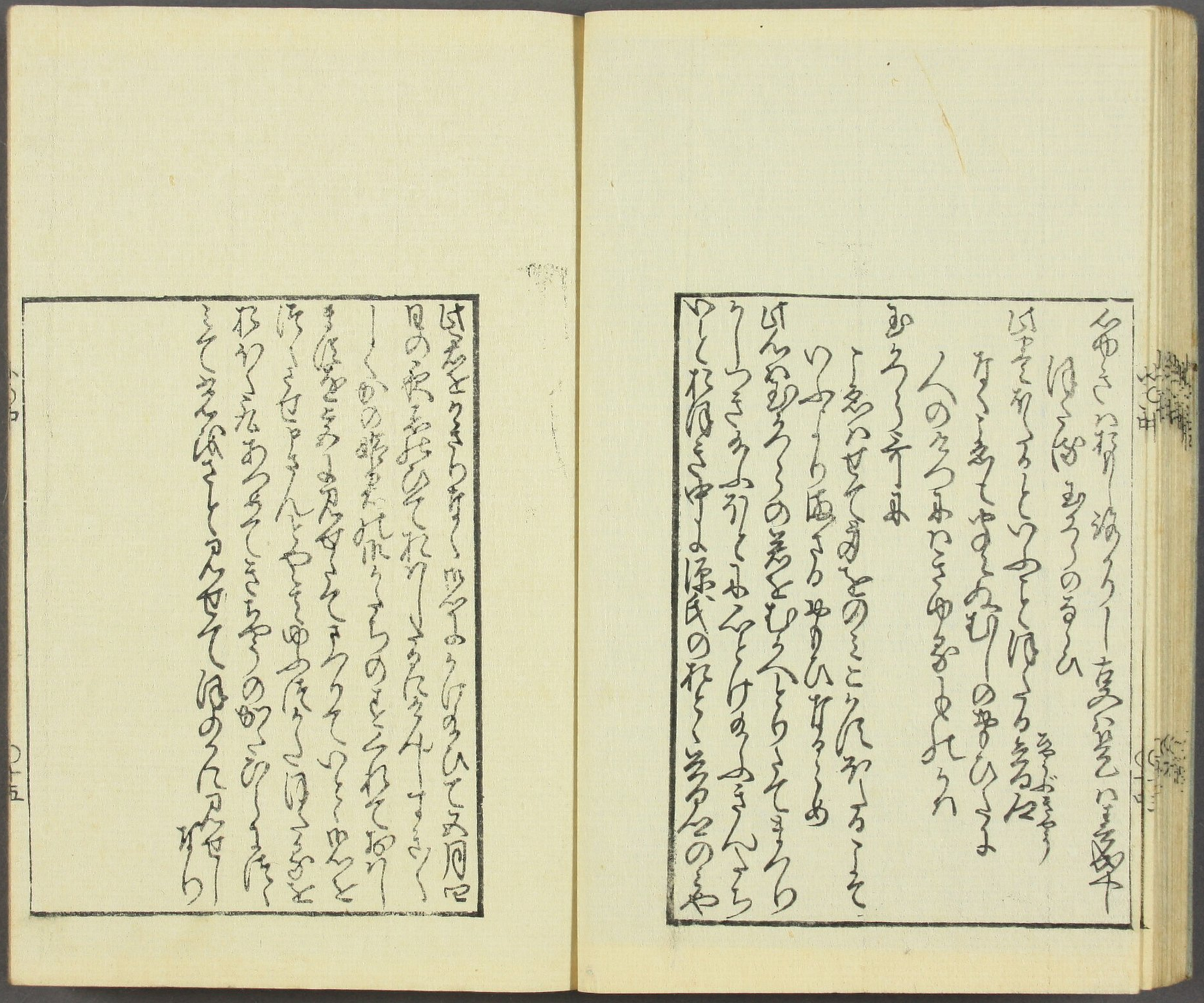
かつ中
○十

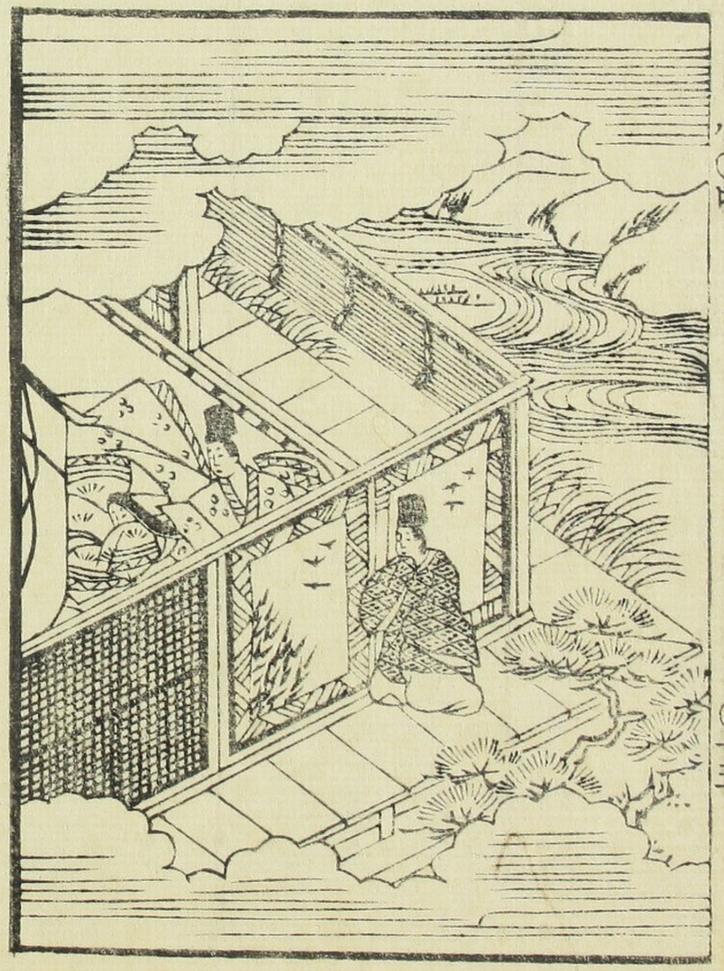


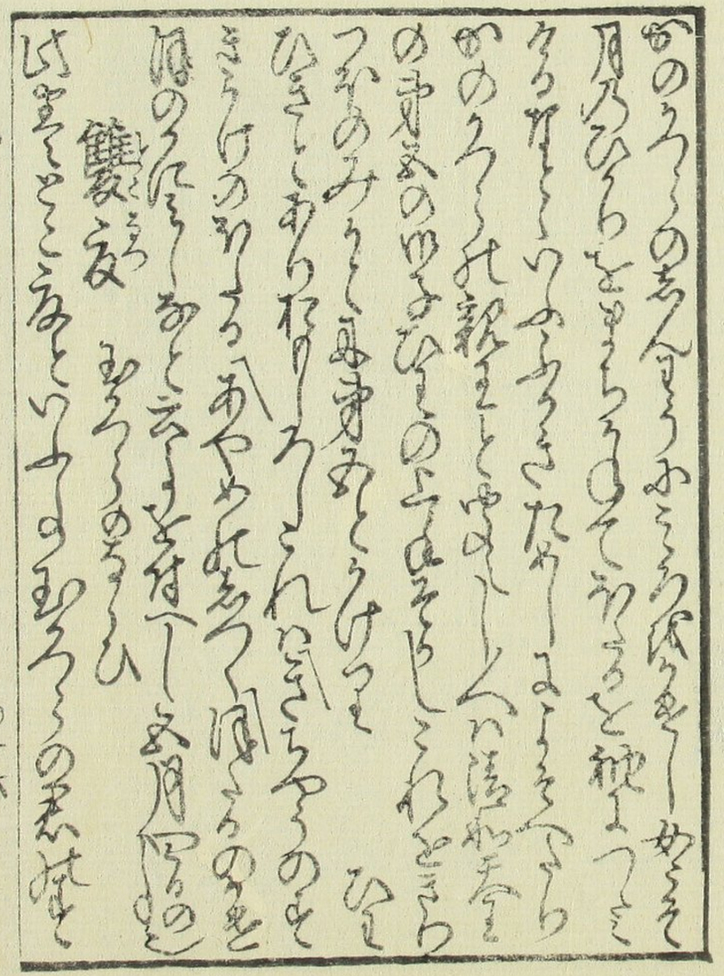


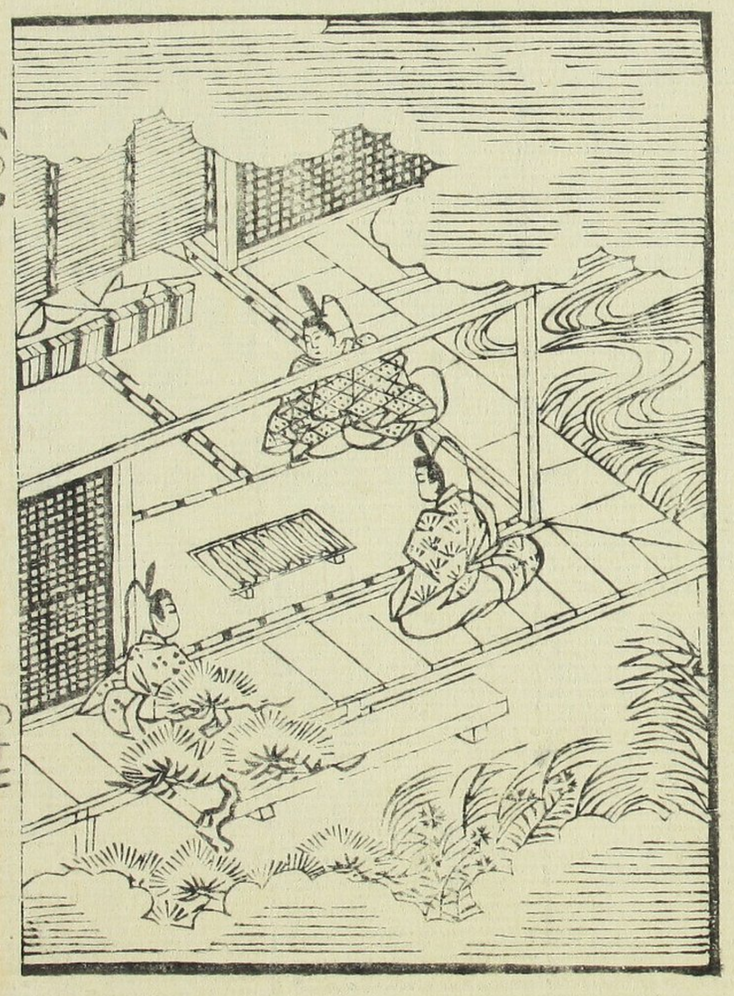
はせてこそすいかの院の文一のくさ
さきたるもとこそ思ふよりは清經とてのちの
ことは大臣なり仁王經は般若經とぞ云ひ
このむ中文はきの文のんかくとぞ仏
のうつくしきさまのことは仏り
花をそまもりたてまつりて中文のゆうこと花
めでたうこそ利てゆはわうこと八人
うしのまれうあるよさとてをるあいだ
のうあるよしのてきおそのてあるいろ

しるしたるものあるひとつくせりうてゐる
その人まりてあらしあり山のさとにはるまつ
そのよりはなをのこそとをしかやとと
とくらもしもしとをはるをきんしそとをのこさて
けまそのあるあるひとつくせりうてゐる



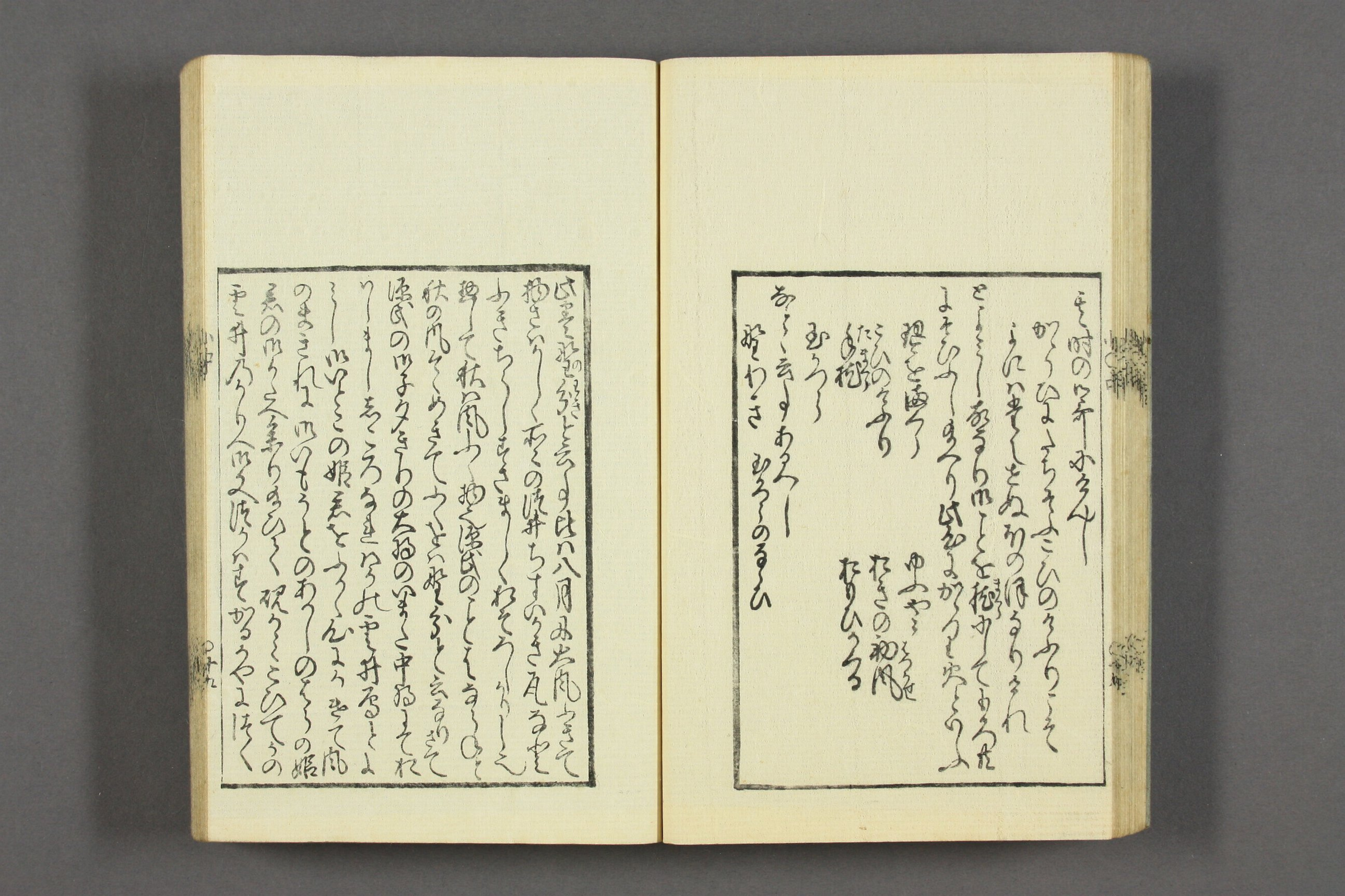






舞尖　むろまちのすゑ

はまをかつらあまをとこすがたんしゅうをながめ
ゐてきのうちとうとし波のはなを
ながめ月のうらあはしまのはまをも
みそまつらやまとれはりめ入て名をも
よれ月ながさうをとこれをかさ
ま舞尖とゆりて四季をあらはせり



うくの文むらさきのうたやうるはしからん下
手寺よ
風きりきむしきものゆのへりしを
又すゝまかくまたくきぬきく
那ぶとみすのあしれ川寺のしはともれ
そのみかゝやむらさきの手やうらむまく
又みしらかすあらへし殺那かわきのあさえん
しあえ風のとふらひし氣を世すのしあり
中まも明石の明らく杉りしまして大らきの風
のとふらひそらりく津過るて滝りまふを
小说りしよりてきりしく杉みしておりと

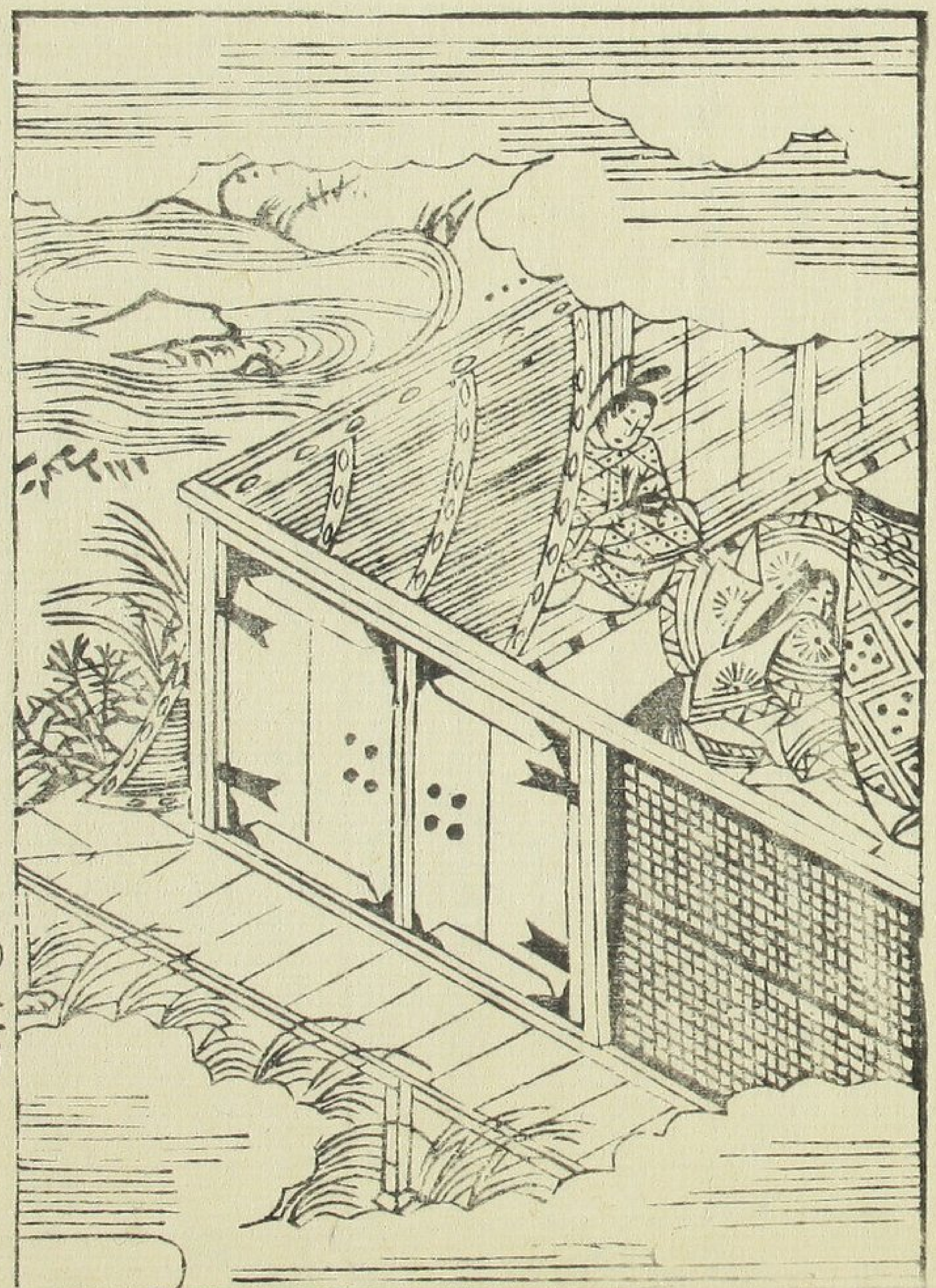
玉振のうたうきさるしてあへしの明寺よ
杉わうたにおさのそらくらかふ風のそくも
月うちひとつよしむらちして

とよくこゝろうりかたなりそのときの
ことは
ゆうきのあしと
萩の葉ふきとる風　門のとをとゝひ
をしくこゝろすとなく　ゆうこ村雨ふりこる
くもるつゆ雨と云すまともあしくいあるくら
ゐ
御幸　ひろうのまつひ
山まをみゆきとゝ云すいにしへ大原殿
の行幸ありさくいまよりのゆきとい
かの原氏の四方のひろ山ぶまいせんめ今そ

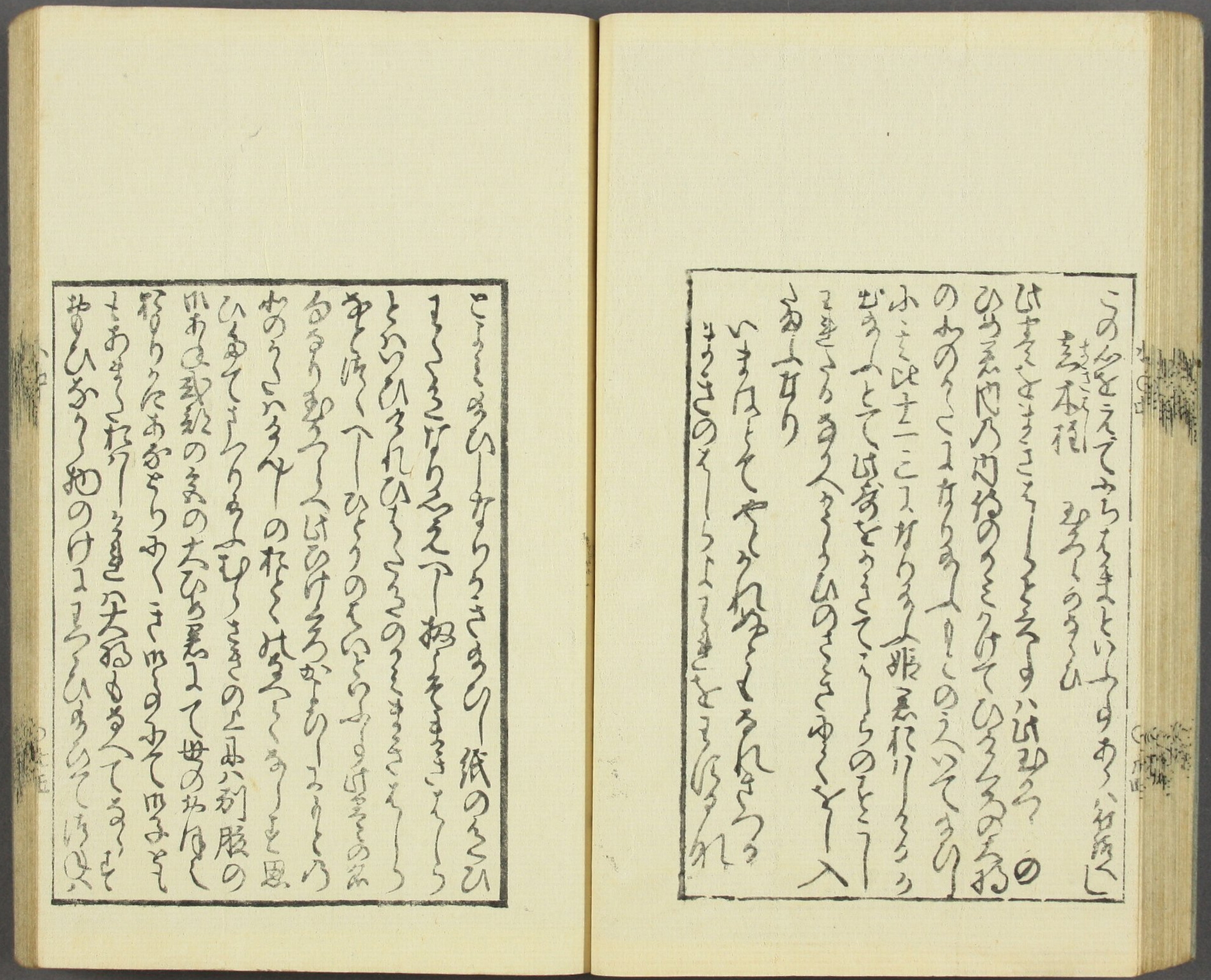
わらーまーまき此八十二月なら大原世人みな
さーまのひーまのせんのん
雪ふるまとそーかのひまろろきーの
ゆろるまとあーまをまをまたつひよ

源氏ゆかりの
よしの山みゆきさけは春松くらふ
かみちかりなるあくやあらん
鶯かりされハそのこゑは
みゆき　こゑし　よしの山
ゆくさ　ゆきさあと
あとりそのまゝ源氏の松くハみゆきの
御供なり
蘭　むらさきのゆかり
此君むらさき夜とりつる夕霧の大将の
御子なりゆかりの内侍のうへのいまさ

なれはりくらりまかくみのくらゐにおなり
まし　あわりさまし
松すの露のきやめてしからそ夜
あさきハうけよめとてらりを
ときまのし中へなりからそ夜とさて
その比源氏のむらしの四さあらとあかひのと
のれあまハ摂政関白あらるの夕きりよハ母
うさのれちこくらんくの母変ハ桐つほ入
みかとの御妹源氏ともいおく夕きりの所くか
よハれらくなりけむらさきの姫君ともいわれ
そらし　けるかれさ也まへハ年頃も　け姫君て



服にてくろきころもをきたまふてよく
してからの内侍のかミにまゐり給へとて
うちより仰ことひようの中将をそへてまゐらせ
よあくを拝給ゆゆしくおもねてもあはき
つきまき内のおほせをみちのきこえけの御
らんといふ事そて蘭の花のいとおもしろきを
みすの内へさしいれとらへてゆ袖をひき
うひきこうしけり

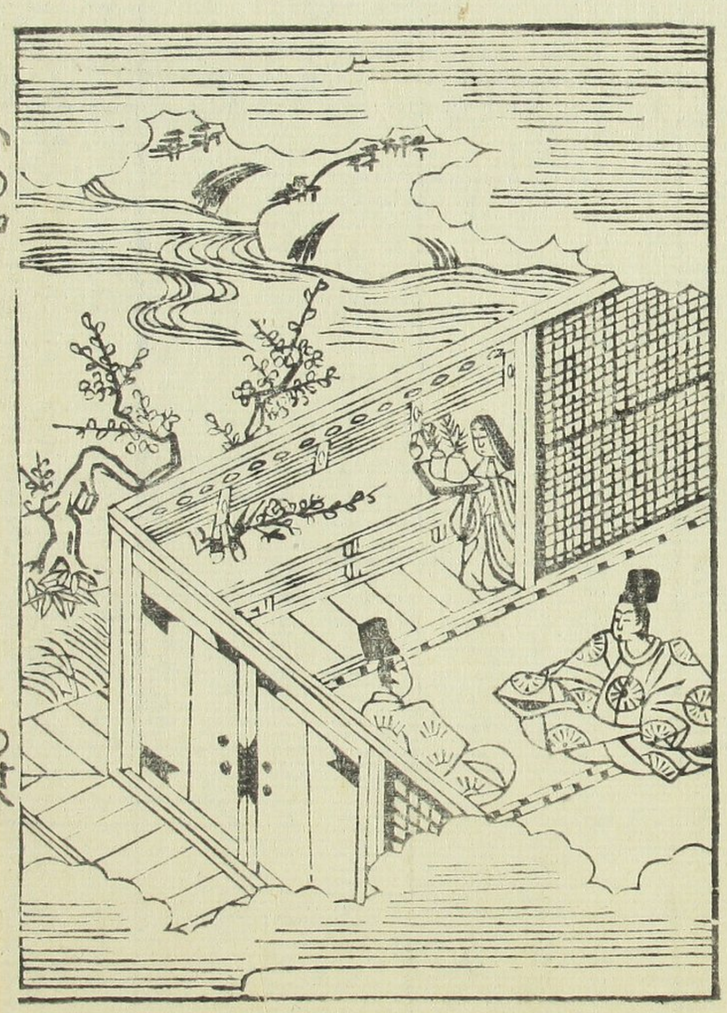


ゆくすえをかくれつゝさる程ゑまあとをくさ
やうのゆくさうら中まあるゝやうるに
ゆゝしきうつゝみをうていみをとこゆゝ
うあんんうろひくそゝやとれゆんとうふ
のうゆゝやうをてうろ男のわゝくて
そそきをまして後れよりゝそやんと
して所うゝうまゝのあのけのわさよ
やたさ所うひとりゝのとうてあるひて
出ゆんとゆのあさかゝかうさうあやそ
おさ出ゝくひうとうをさぶうゝわをを
もうち四ゝやけうれうとせなり

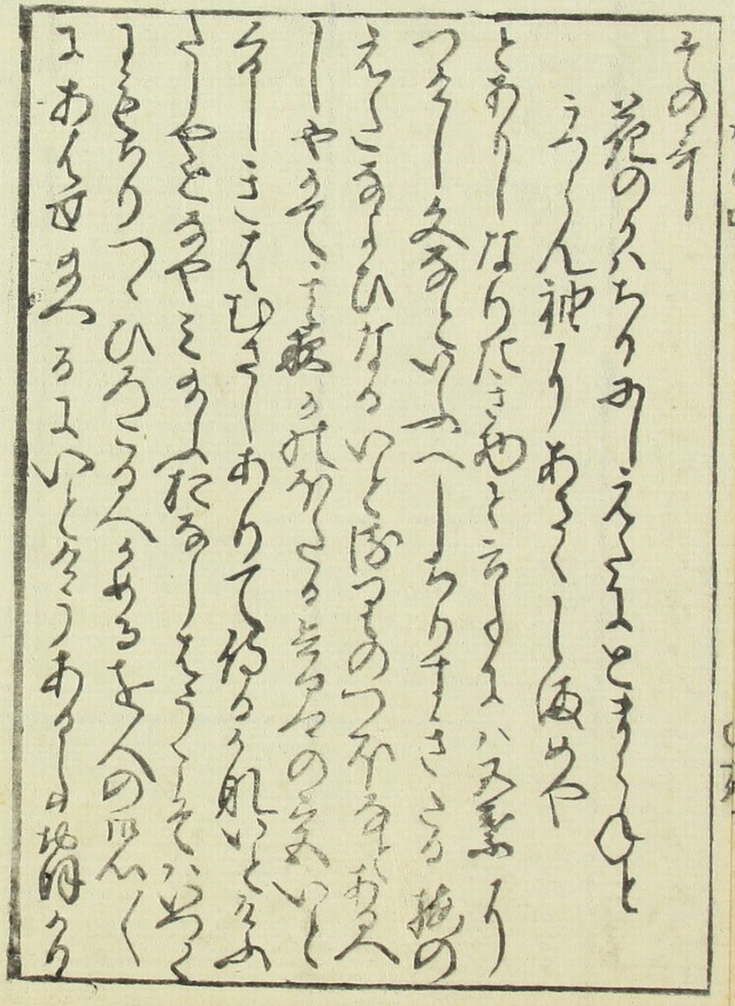
それからはとくうとまくかりそめてゆきさて
つひにくもろともに人けしきん
あぢきなのよの　かのけ
うらむ
ましいつすれて此発句の文は高ねにひ
さうそのへの是より後は出ひろの冬のたれは
しましても兄さ返々身をもとくすなはち
つくしくおもしろきことを是をいへる也
抑まず発句さらにふかくもやさしきにしも
ほに関白さまく内侍のうちのまんどころ
みてしよしくきへすなりゆとしかり給ふ

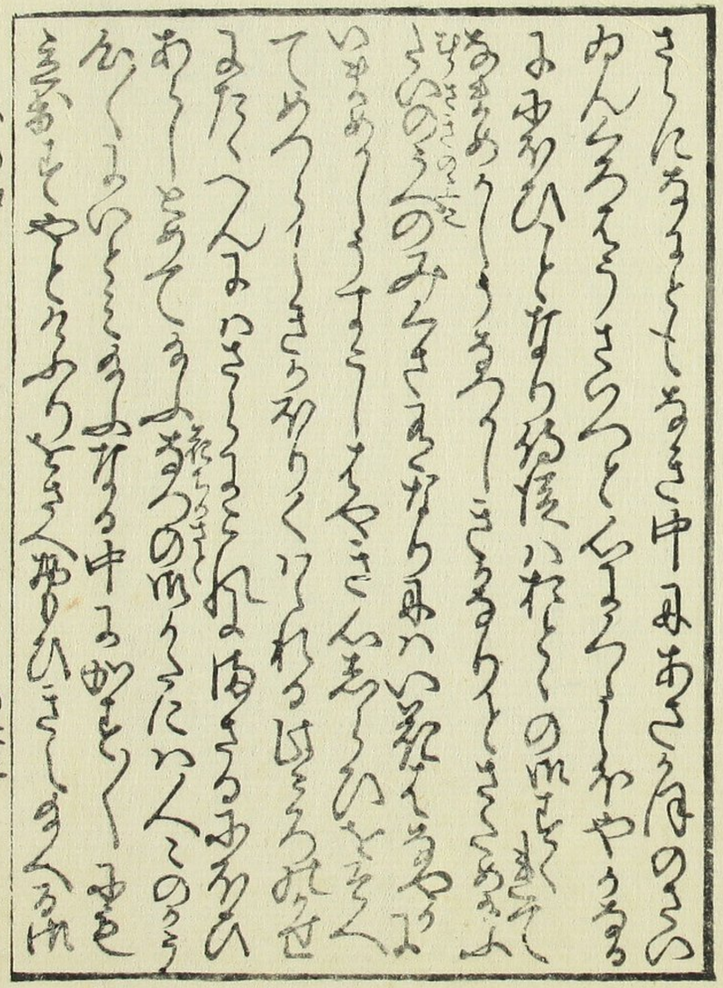
ハさの志もんのうへいましそうの中ねとやの
しろはむかしの内侍とまうしいめくるを
あらしとしてんむとうけやりして此奇あ
なりつてゝ是ハ志らしあさきころをと
いしるの宮々のいろしみしくてたし
とすぐそてさうりしすり此夏のんのうへと
八梅とぞいそろ中ねどもいのしうさやうれ
ともいよらもあくるへうくるかへハふかくむ
うらハたえしひかくれりましをとあて
いひまちりし

十八　梅枝



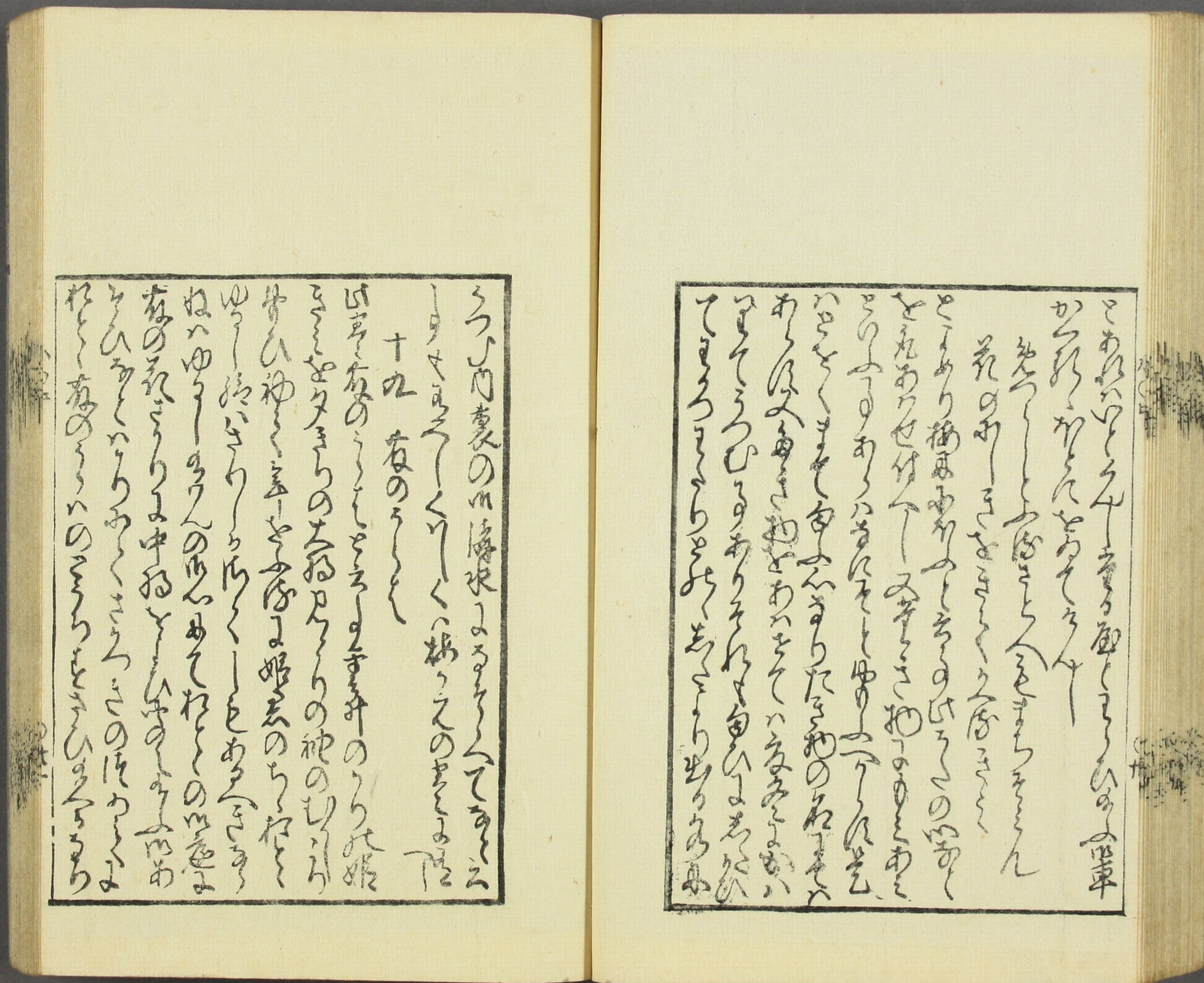
以来ゆめうつゝともさだかなら
ぬくらの宮のゝ院ゝてたまはるゝ
しるしあるべきの脂燭のもとにて
ものゝ心をさとりもとめ方こゝろ
てゝいとゝえあはせうこせんさいのあんとゝ
うのあさうのあんにこゝろをそ
ゝしりゝかたりけるをきゝちりすきる
あるえにふるそうんられつかこたまはるそ
まのそゝこゝに付白きつかまたきめのまてあと
はゝてむまひ分るひとのさ海ゝひこゝえ
ゝもをゝ





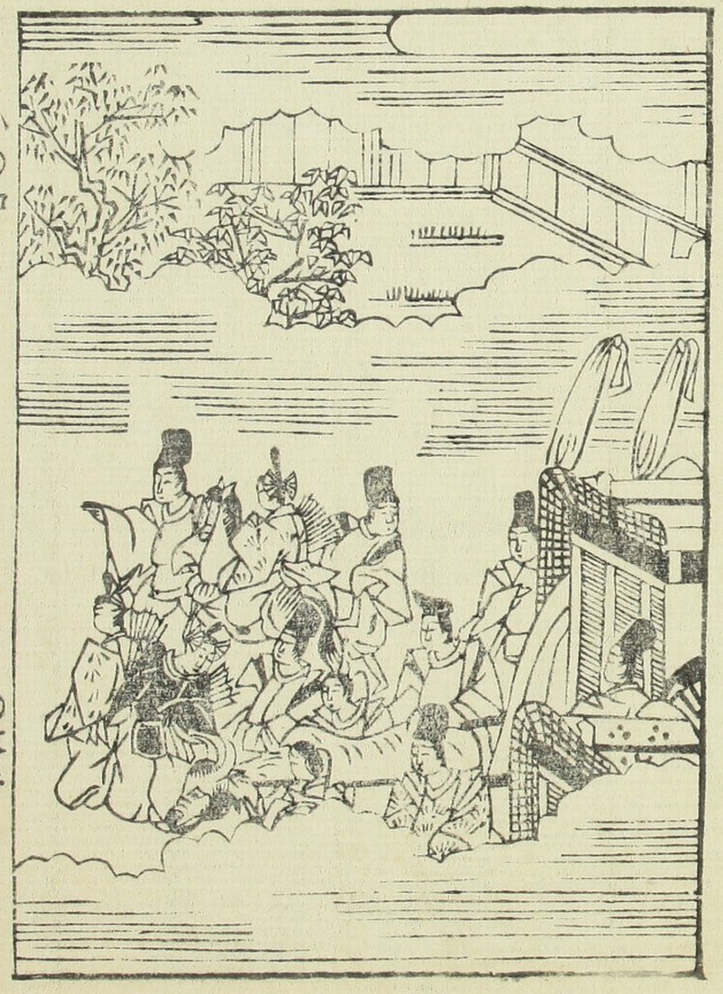
かつてたゝえうをひとくさあり世まうりさは
ゝりまあや ゝかなるゝてあはまこのゝゝ
あのの西ゝくゝまゝゝゝゝゝゝれおみはひ
のゝゝ海まゝゝゝゝゝまんまあやゝとと
持ゝてゝゝゝ先後院院のゝゝゝゝのゝのゝのゝ
のゝゝゝゝゝゝひたゝゝゝまゝゝ百ふの
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とゝゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

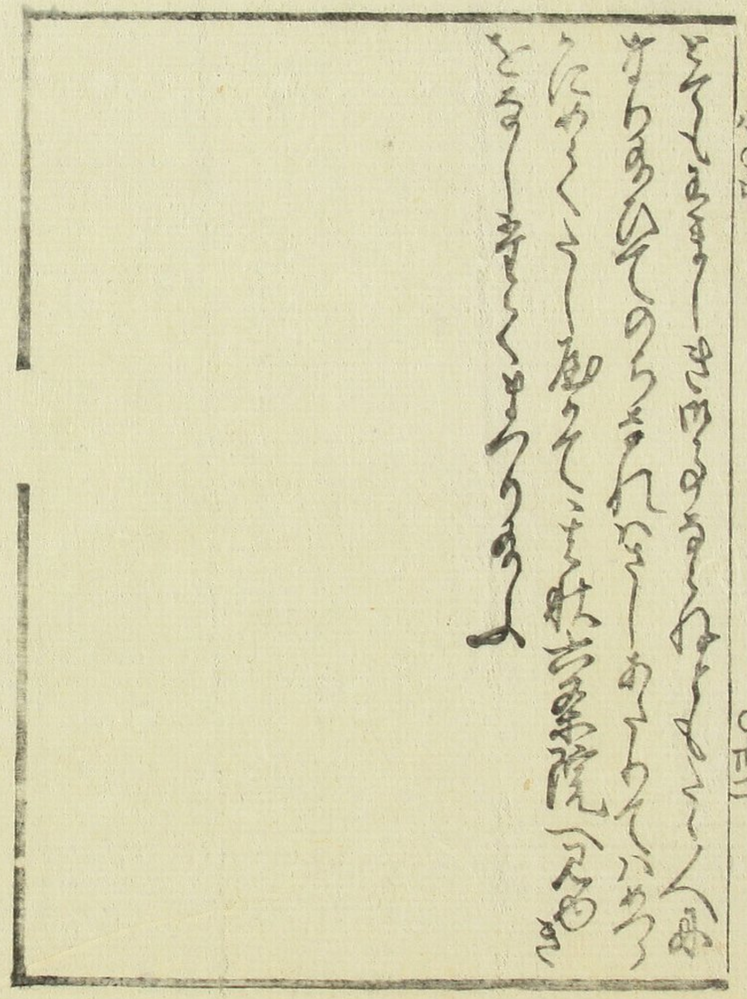
かゝ院ゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のたゝゝゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



はゝきゞに歌あり
とふ日さへ花のつゆへのこゝちして
ましかりつゝもたのまん
ゆふひかりむしろにみえんといひすてられしを
むしろなかしいたらん人への花
まつこゝろはすゝきてうつろふも
ゆふかほ
つゆのまのかりそめことゝもしらして
花のひもとく おもひなん
おもひなくむかふのたそかれにほのかに見え
きりつぼに六条のみやすところの

つりしゆかりあはれくのはなのつゆさきかふ
はゝき月やゆくなつて打すし月見あへしの
ゆふしのひかりことゝもうちいひ給ふのひ
源氏ハむらさきの桐つほならぬゆかし十二歳のとし
のかゝゐ乃はじめにまいれハ源氏乃ほさうそく
まひりきけやうやとまうさるゝぎ初しいかやう
とうかんあはさの家ちのは母一乃みや
はとくそのまへあさしの中にうちとハ付
ゆかりかくてそめし源氏の御すく
三十九歳にて太上天皇の宣旨かうむり
六条院と申さし経をさきさまへのふ





四月のなかばのころさいつかうりうさ
中納言こうたいこうのまへ源氏の四位
のすけ中将とかの人のうへ
しいそのころ
ゝくたうしまれたまへるとうと
のの方四月のなかばのころ花いしまれ
さとのうちのかんの
を見ありてそのあくるつとめて
来雅院に源氏
ゝのぼりたまひぬ

二十　初音第五上

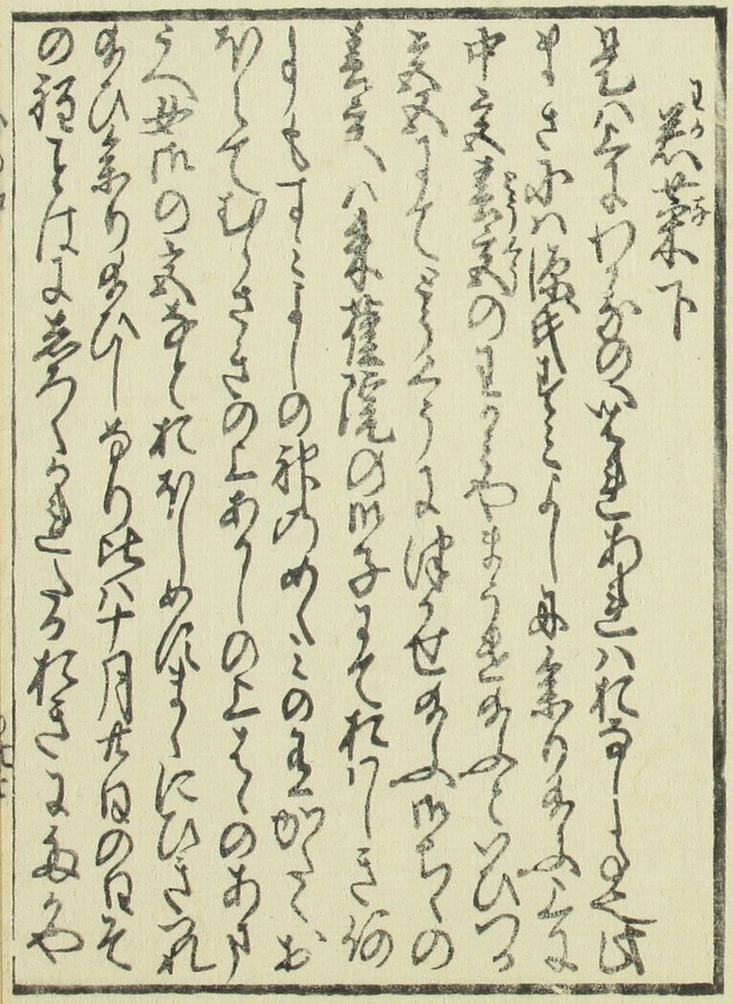
はるたちのこゝちしてうぐいすなどもなき
はるたちのこゝちしてうぐいすなどもなき
のうちいのけうとうのかたのわたりうつ
しうつくしうこゝろまけしたり正月
なかつ日の源氏のかんのたちてゝ御のひの
へてひよりあるうちのかたのまへのこゝろ
めてゝうつくしうしてゝの年
まつ年ふるさとの中松をひきつまて
ちとせのいろをとのはるかぜにこそ
とゝのうたのこゝろ

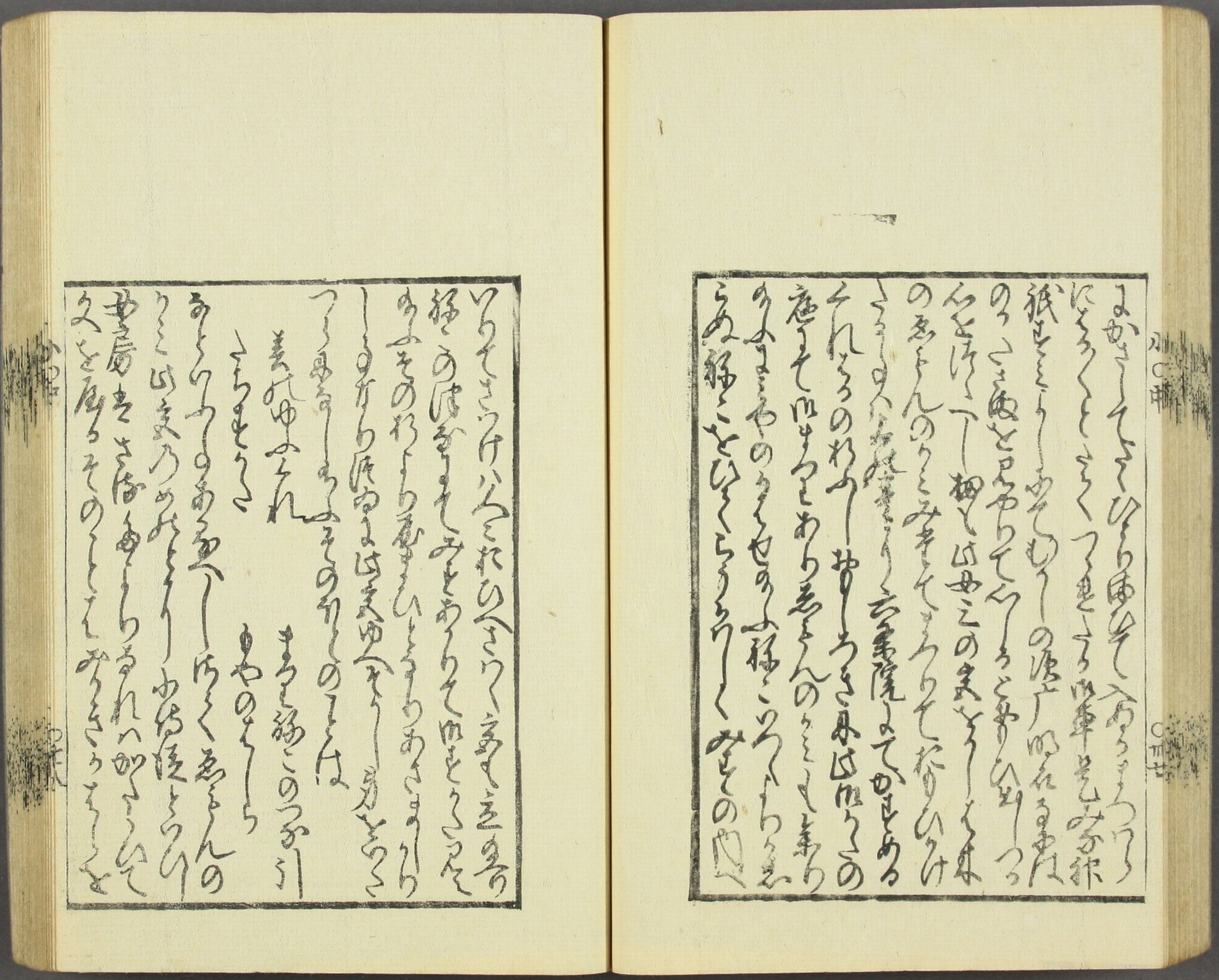
小松とのゝすゑのよりひよひまてや
敵人のまうけあまたとしとうひ為さく
さしまうりしまつり此ハ源氏の御家の家
よ御くいらひかゝりくらへハ賀をそ甲斐
より十よみつゝとし無よいひしてさ大将を
こなひらひらとその人一門一家の一とすまれ
つしをとも備まかりて主まよらまそ内侍のゝ
こゆにみし御世もかれハ祇のひはまたくへて
れりしきあき月とは正月のうちのみの日を
子日とて敵人の内へおはひまいらせまゐらせ候
こまてゆをよろこびのあつまる此ありふれなるし

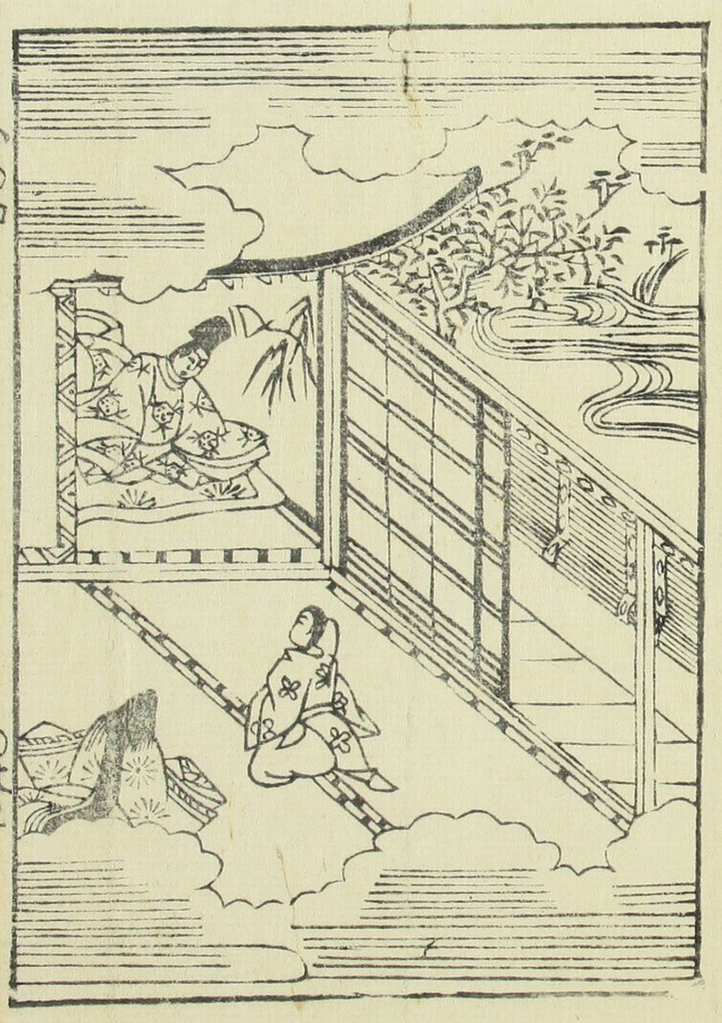
さて後々内侍のりはれりしたらくまつら給
へいりと孫ひまさつまてめてしみちひ色
を源氏の御めかのしかりをかなよ天下のひ
あられりかすへてしかゝりをもむゝうは内にも
源氏の御をし平家をハまてら代すゑのかへ
るもまくへし御代をりつすハ人のおもらさすま
家まありくをことんかり仏前のうらしを母
あらしの中なとうくへ気らるひくめくく
うりしまさり文中良ゝやうまにせあつま
あらくまたあらしのらしにとせうらしへたさ
候ゝていゝそうわさまてしうらさん代よ此孫

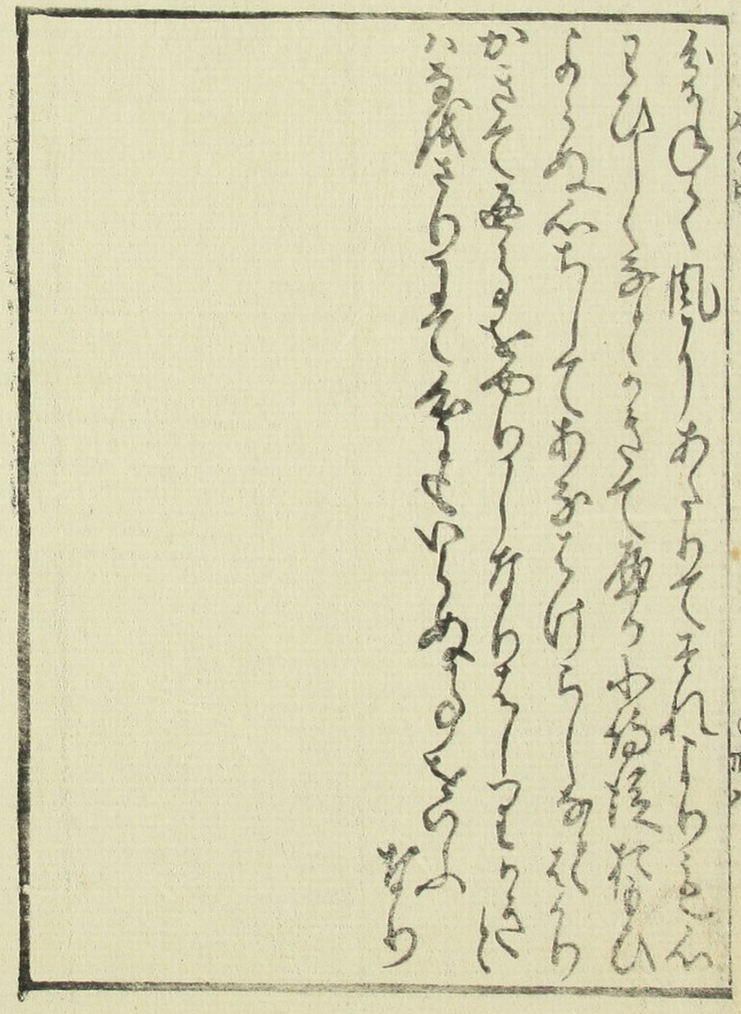
ひもはしみそわらとあまるかねてとりてそのやとのむこをめいりとくもかのくこのくまさうありくてま南しとみかまそのあれはくのいかりとよしうしけくくそとさこる熱聲ともみえてこふ入こくふうしてのかけられまるこまとを源氏物語ゆてしそすまくのし給わりとりかす猿楽一はあしのくをもちろん今そみそらし菱ならもうきこうら今夜のくさはひらいてんおりつきをくおりぬうりとそてこしよれ菱うくうらはなさ菱拙くうりのえかさま人てまこハいかまもはん

よハ菱かくりあくしのはそや右をるをおれ源氏千ちは女三の宮とすしハ菩薩院の御こやよておりわ人おやくの御中よ庭のとからわあくふとやしこれ日めして宗玄院よは玄々とあつきそてもつりよ六てきのめんゆし字都二月あかりこしまそは書きの下ようしハ本の承とんかくこよ名をうてかわつ太ねとうく給ひしくこうり源氏ハかくひかハくるとくこれよわハ且ものの上よ言日とそてハ太てくは院へうさこひ新家花ひて唐ゆへのよきなきとせ世の御代ゆるしまて文ちてむかしのかのしんゑへし



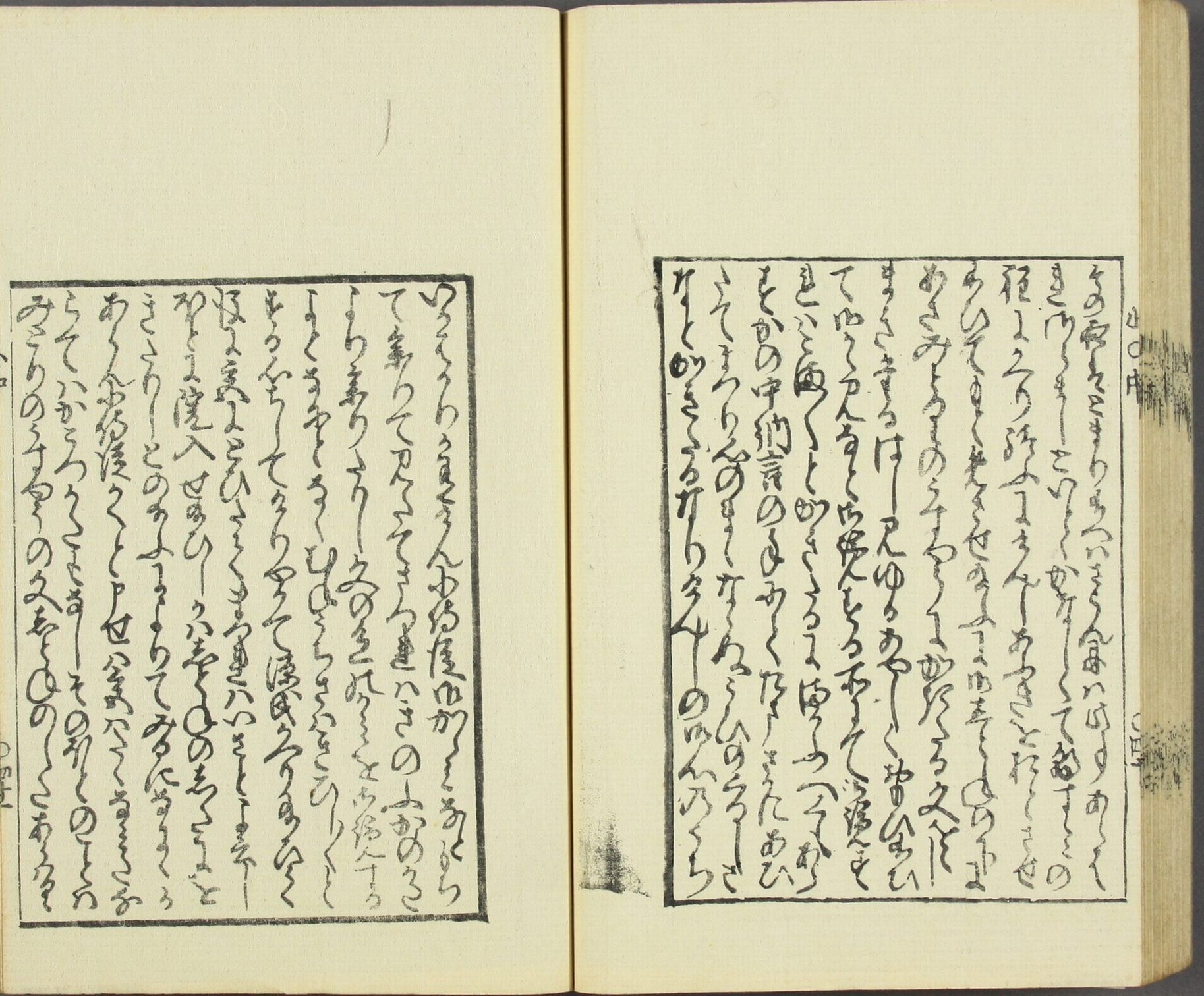


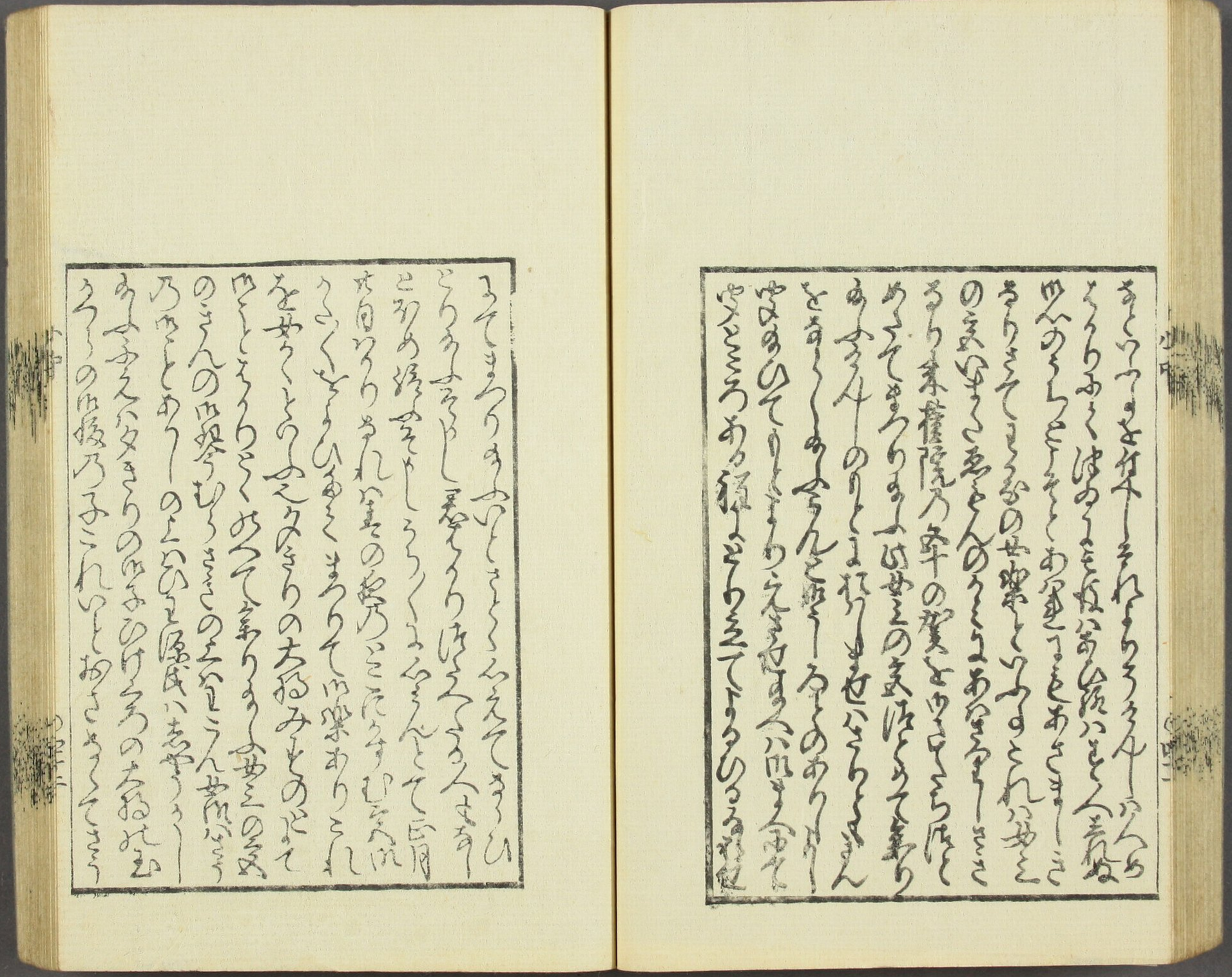


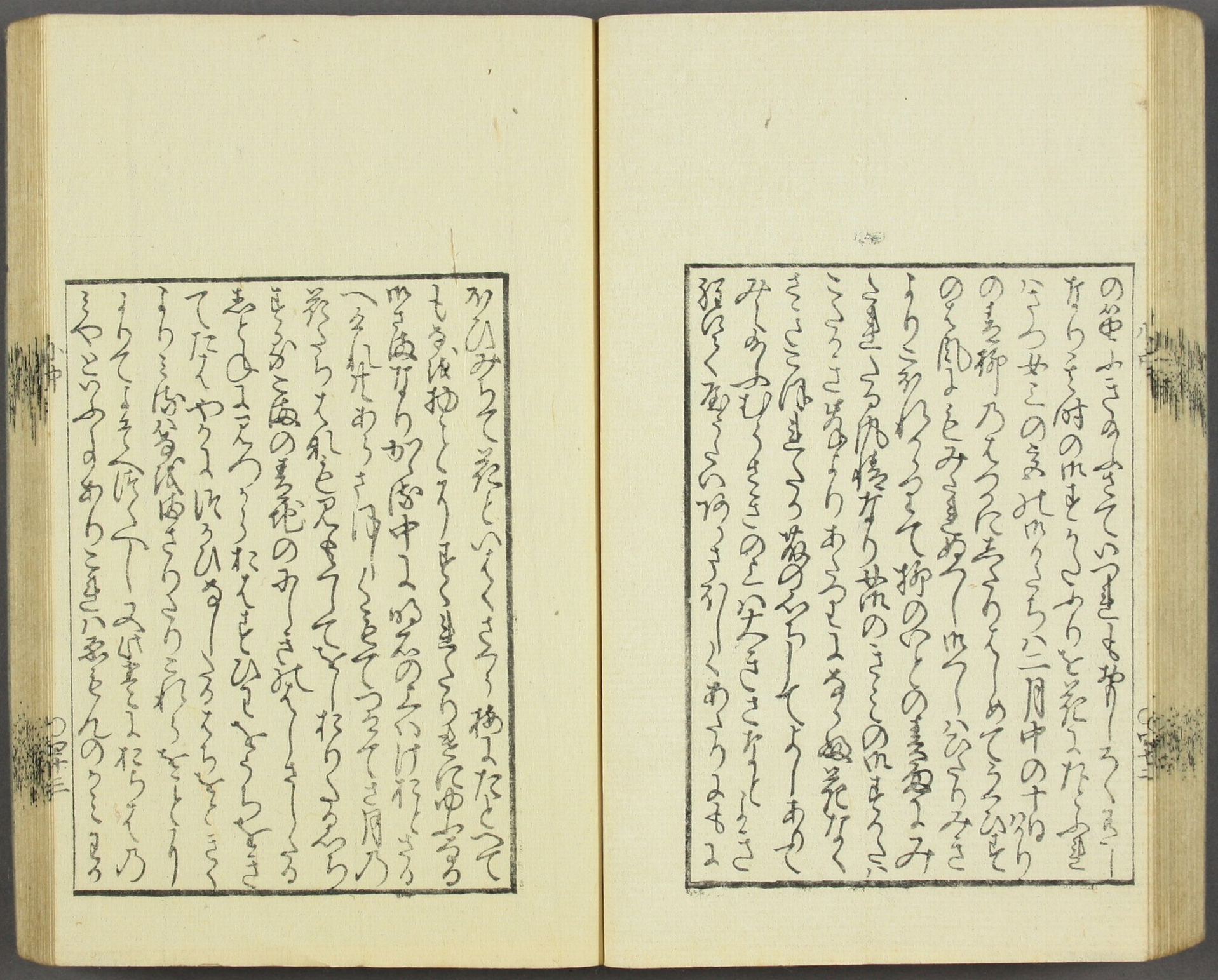


かくて中納言殿はおぼしめしてかのよあハ
世継の御後ハ卯月そうしそのころむしさされ
ところしまひくいとちすゝのれりしうき八
院もひくさせられおりてはゆうられけり
ますせハうき日まはつてあらせらうすら
やうく猶みてろうとまかされ候を御年の比
今と思へてそくてなうやまさせまんハむかさき
のとれのへとにさしあんしのうるむともろ
しくおもひまひて隠居れハしましともれは
まかさぬく御ほうしくのめしくお祖
しなりありんのつとと言よみてろうしを

かくりまつのさまへしそてあわしうてれ
めとともみあま世らまたれけりしすせハ四位の
そくしをうくとまつみやとかりひかくさふ院
ふ絵のうとおうさらされハ夕の世それちそむく
きさのよみくへ給りもひちらんとしますへハ女
とのれまうらりたしくやかわしうん作とゆるる
しことはのかんう
夕顔とへえちくとくし月まちて
人まとまうせとてそのよすもとん
月まちてそもつかうかとのまくハかまふ
ゆやとなりしわかなのとかしくれ陰して







[illegible]

いかり未薩院のうしろ山にのぼりて

[illegible]

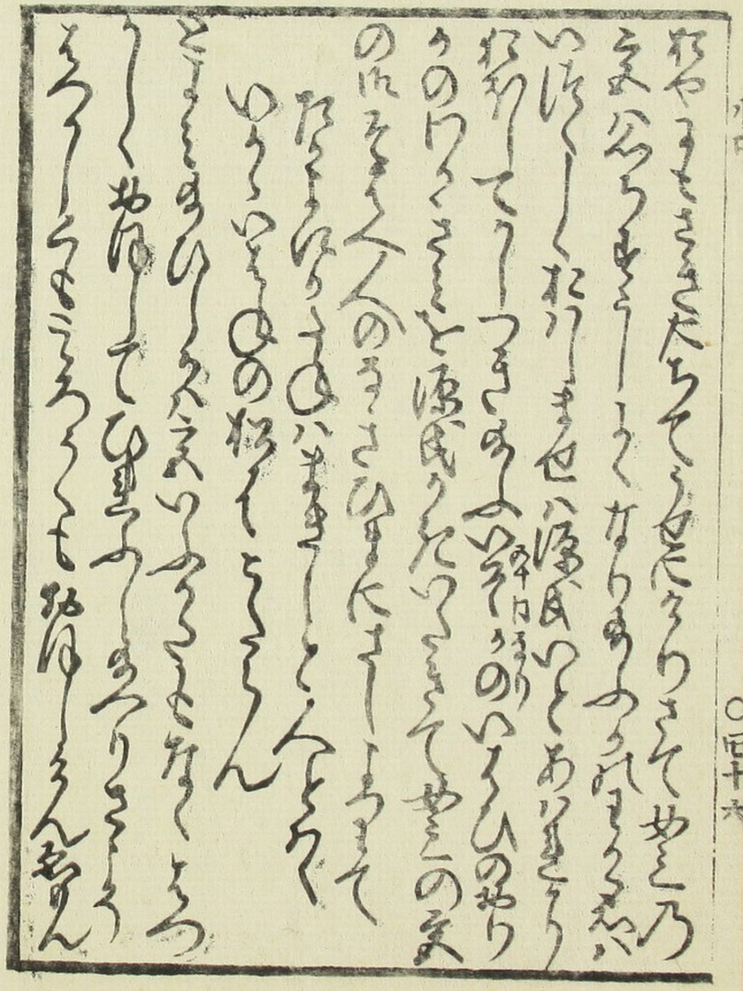
[illegible]

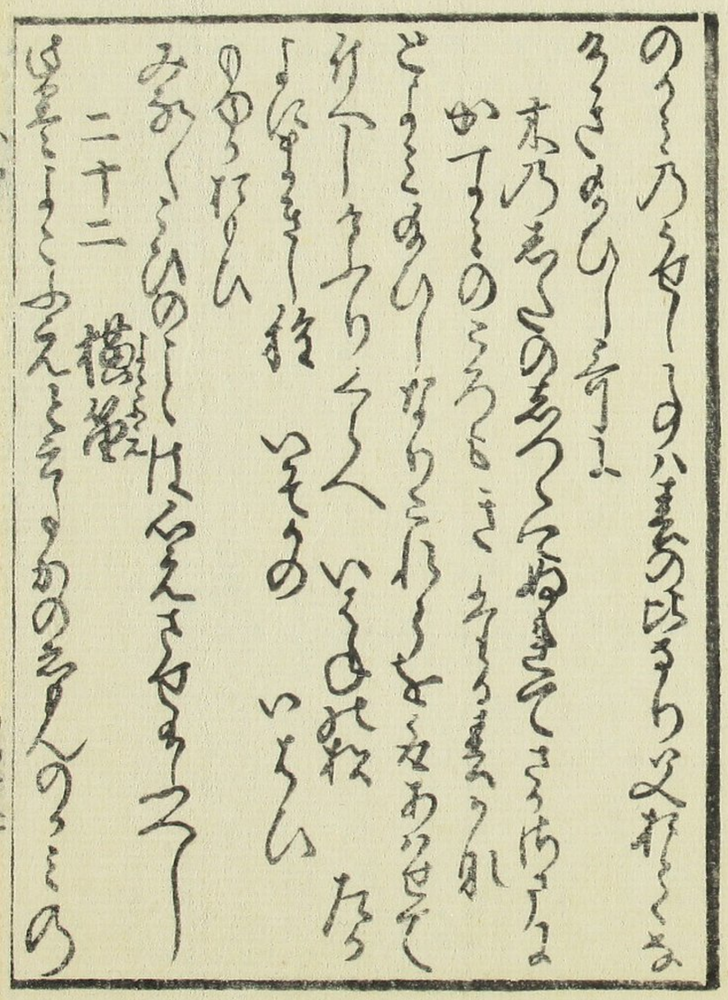
[illegible]

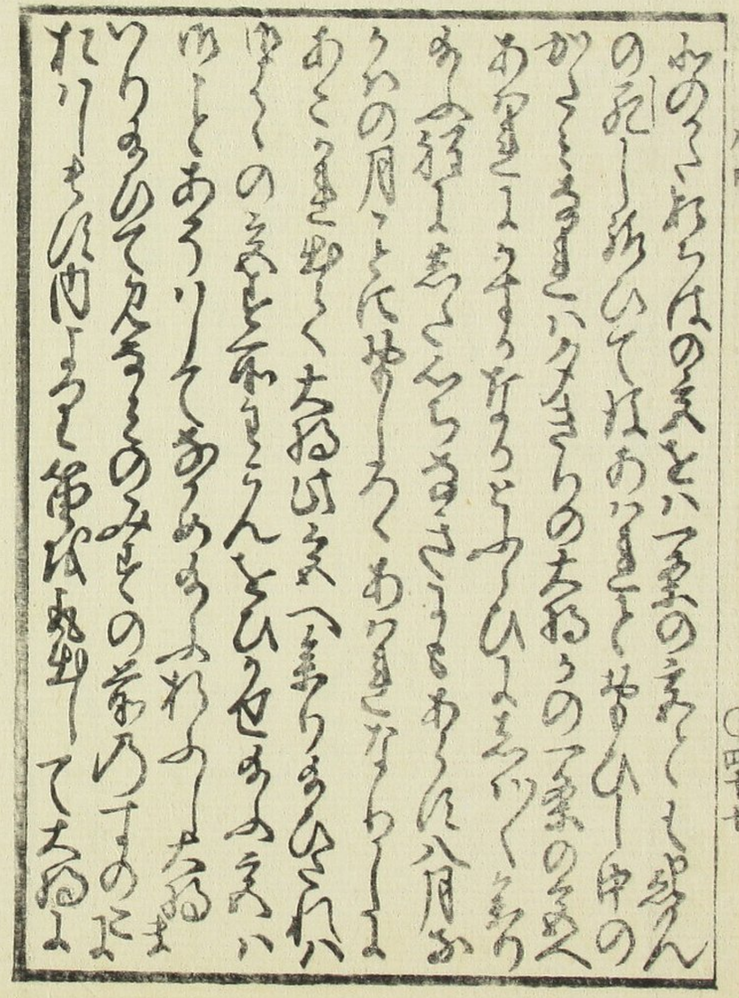
よるきたりのあるじ
まことにまことに
ゆるしたまへといひ
ながらいとのあるじて酒をすすめて
ゆるしたまへといひ
なりのあるじとしくしくさめられ
かきりのおりふしなりとてしきて
てきつる
いとしたてまつりてもひとをはぐ
さしあれすひのまをやのこうん

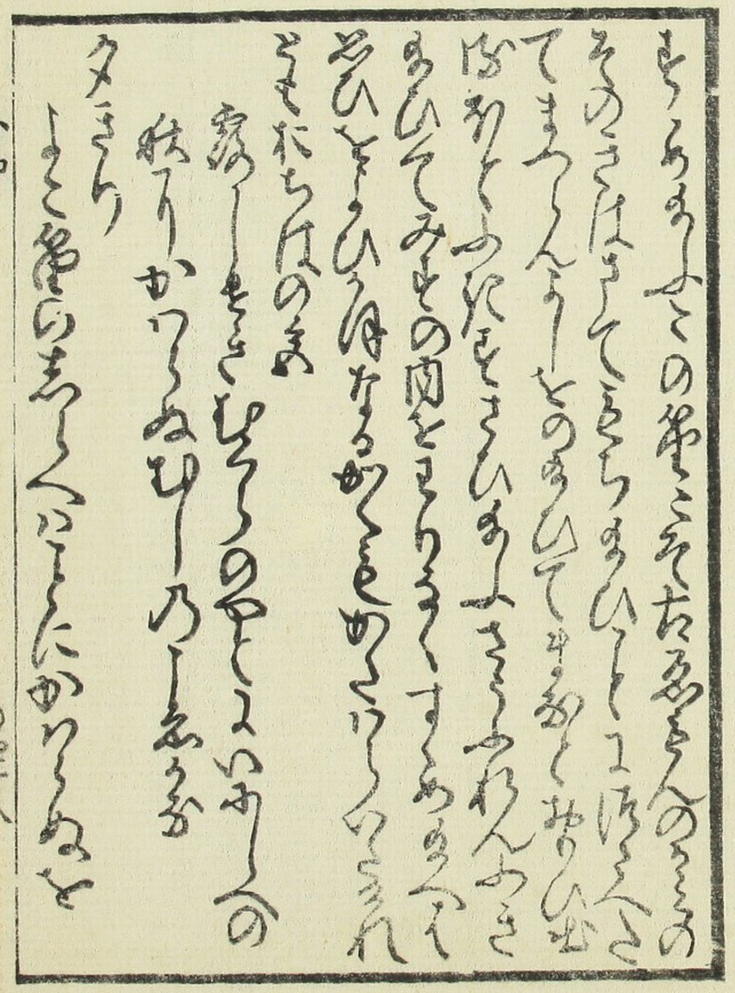
[illegible]

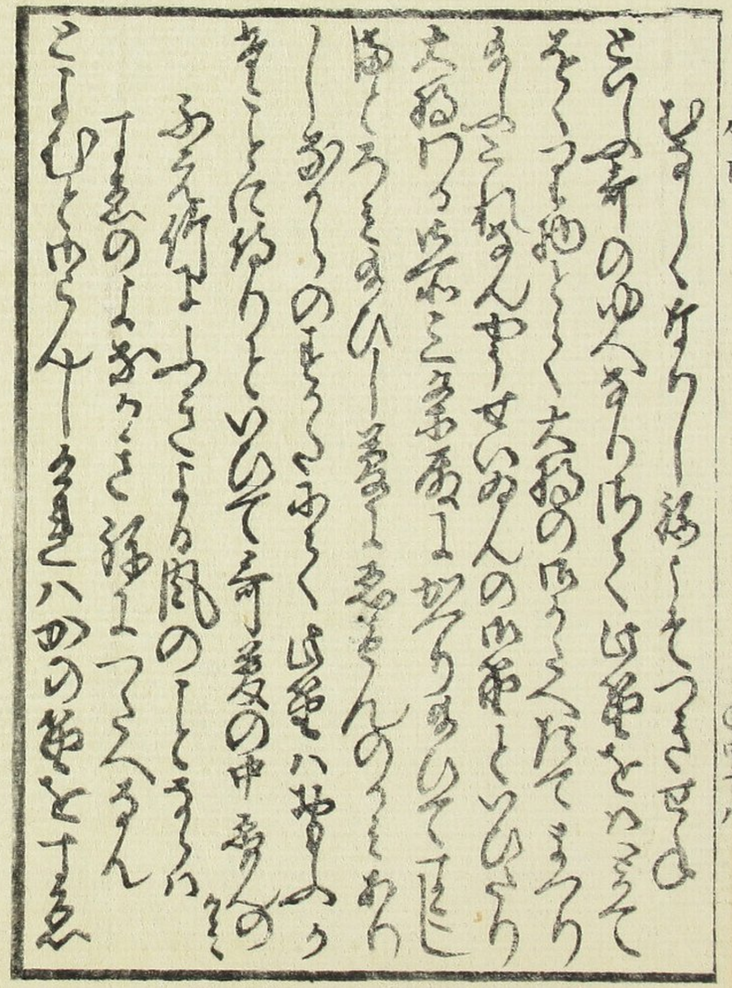
[illegible]

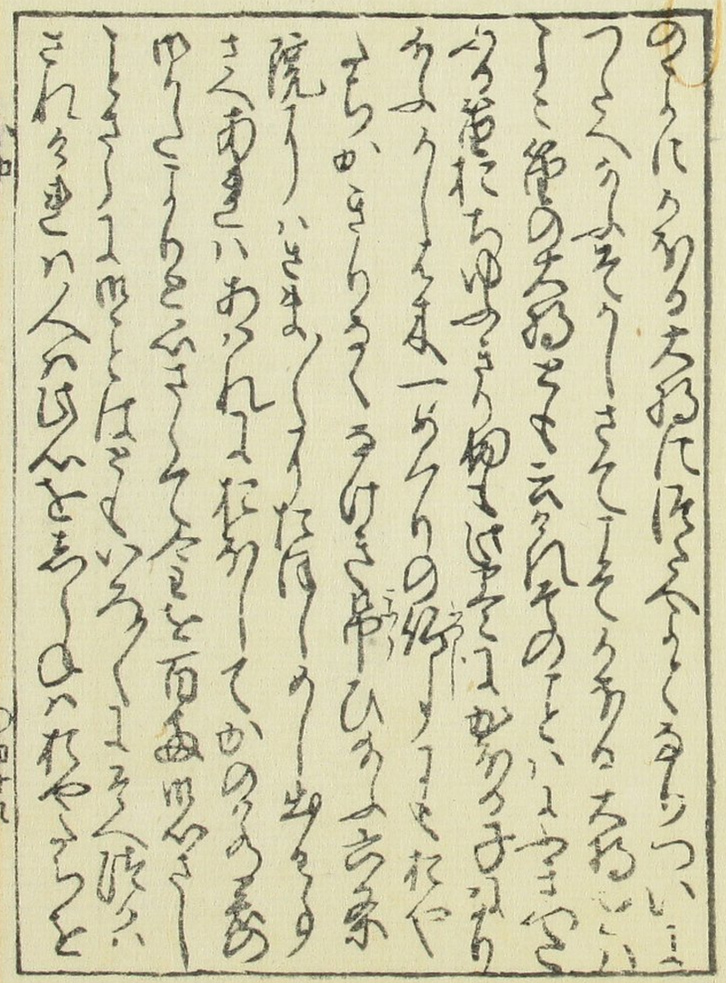


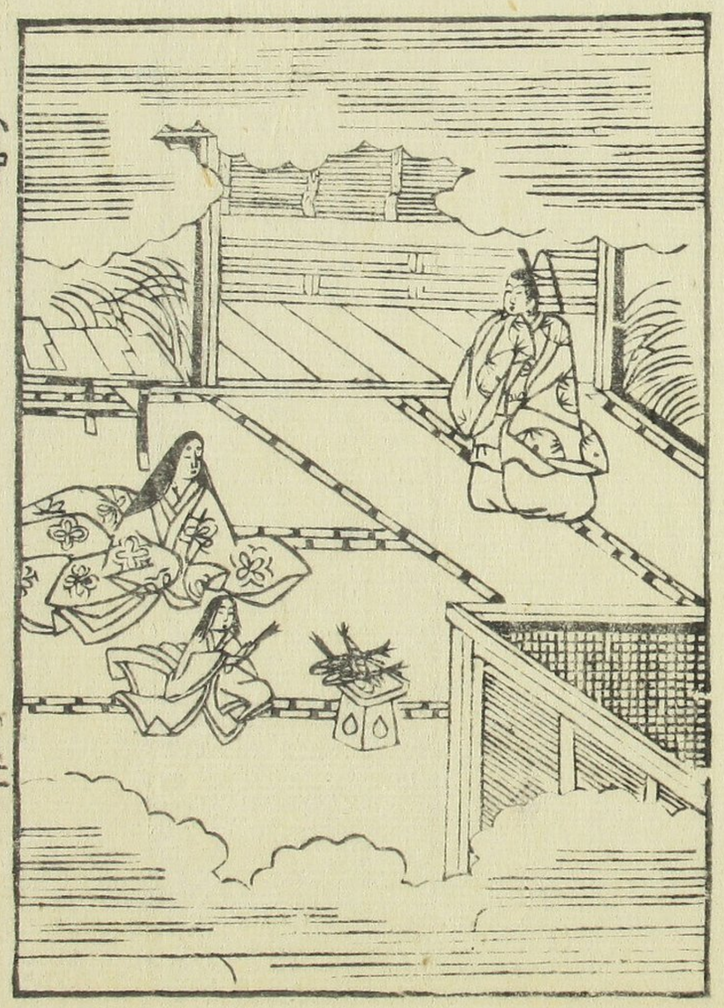


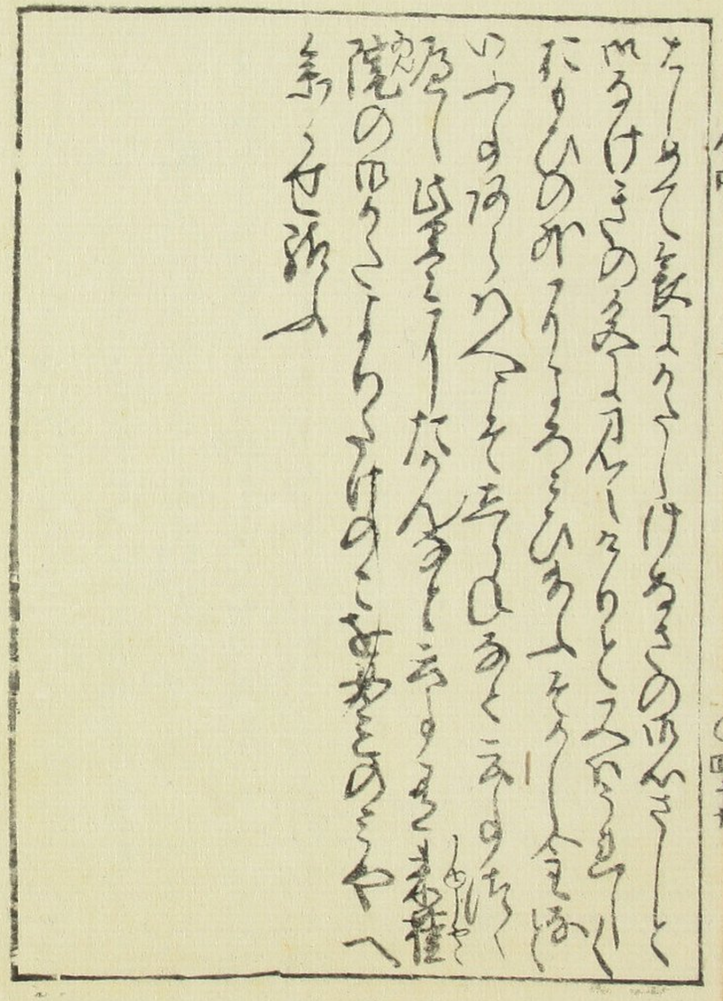


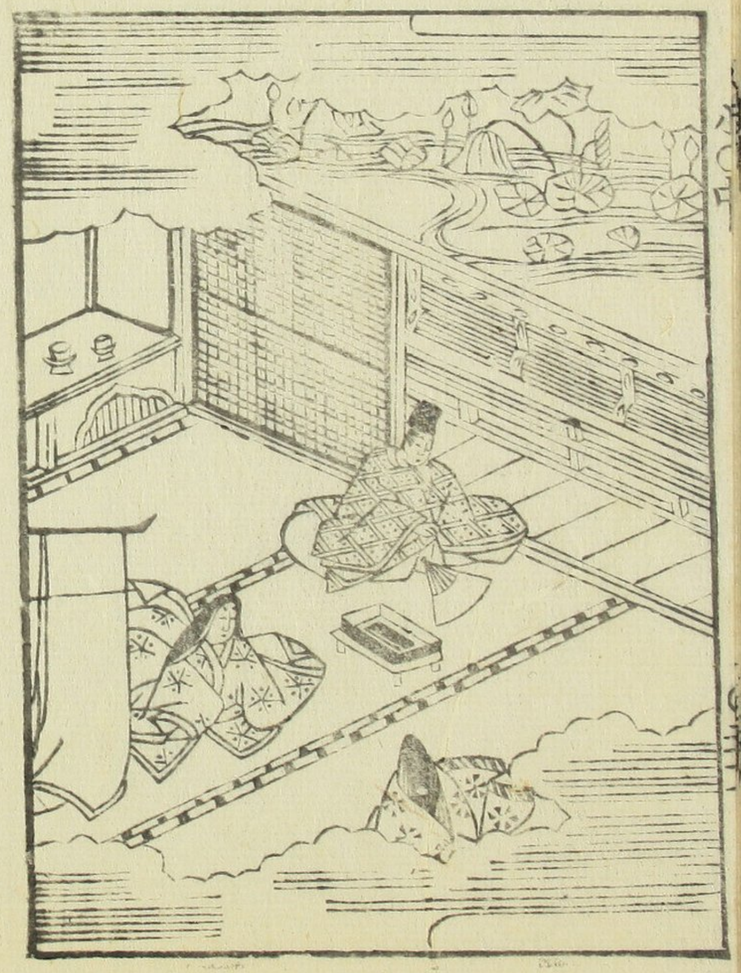


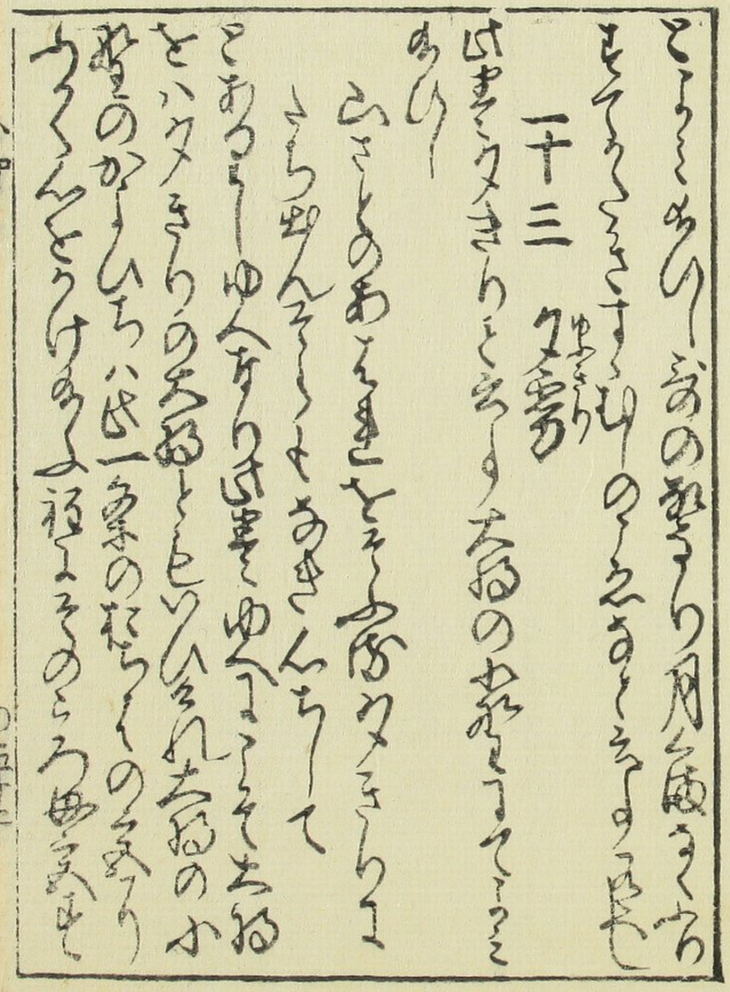




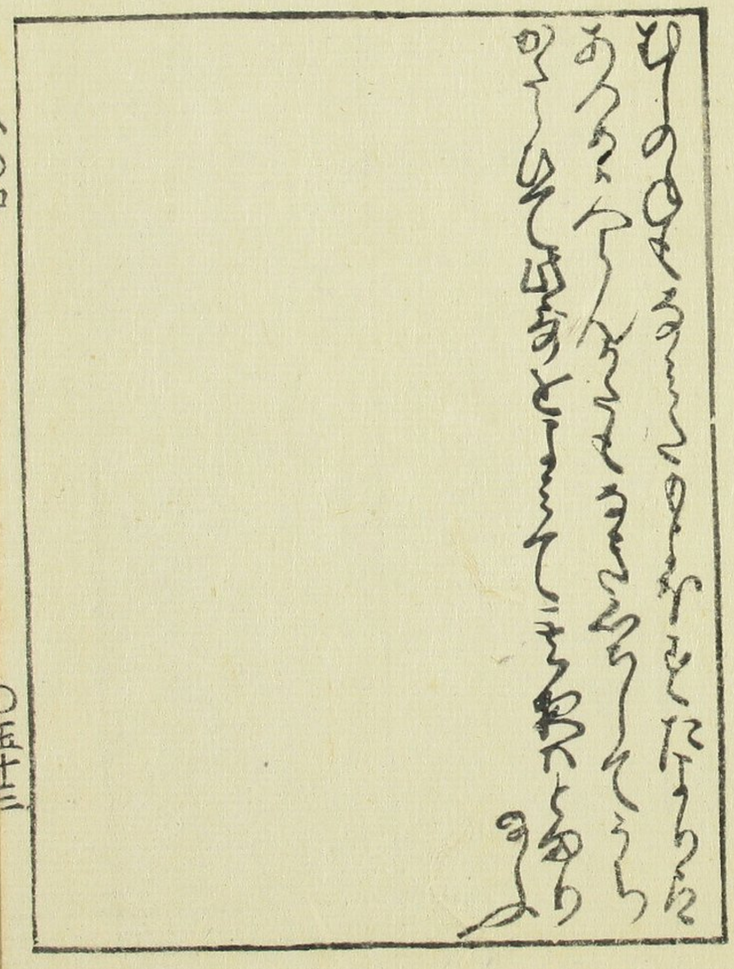


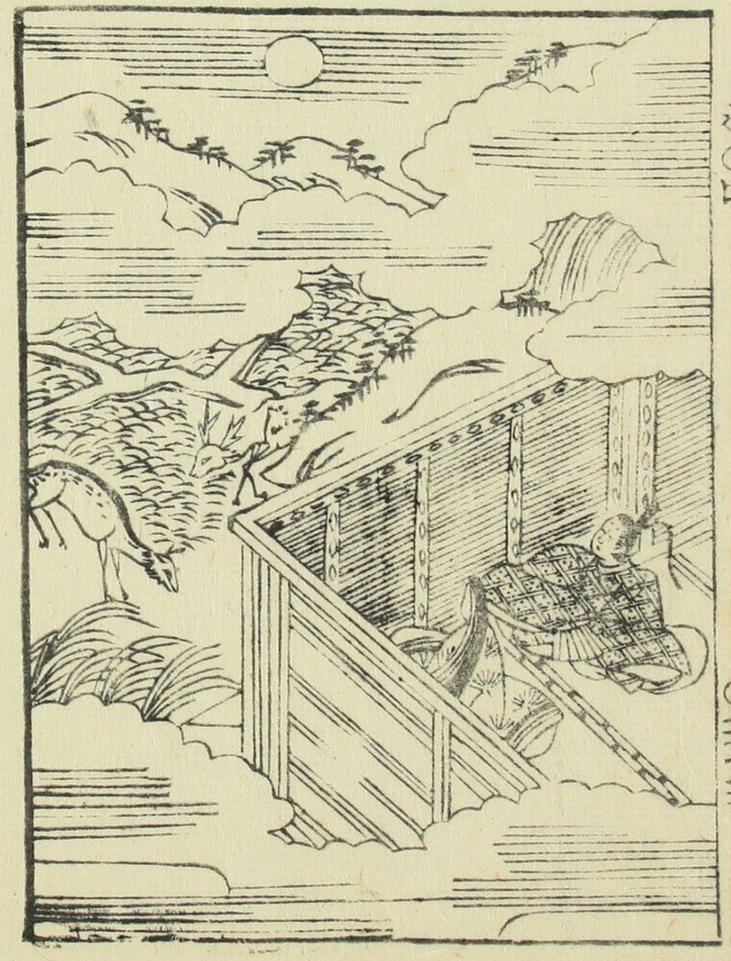


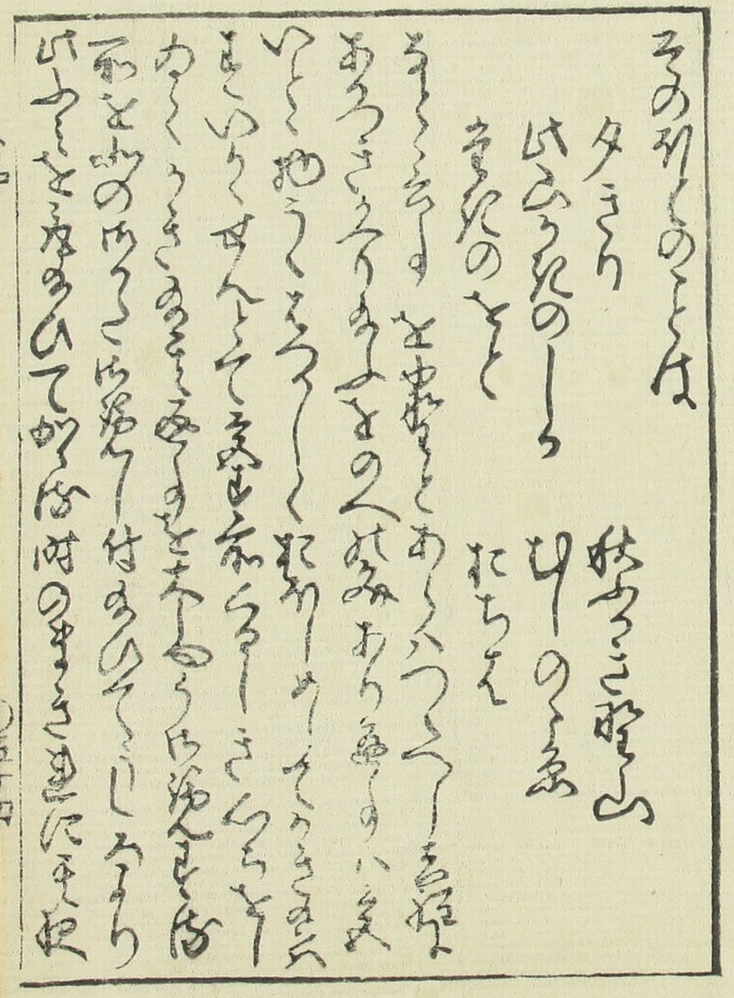


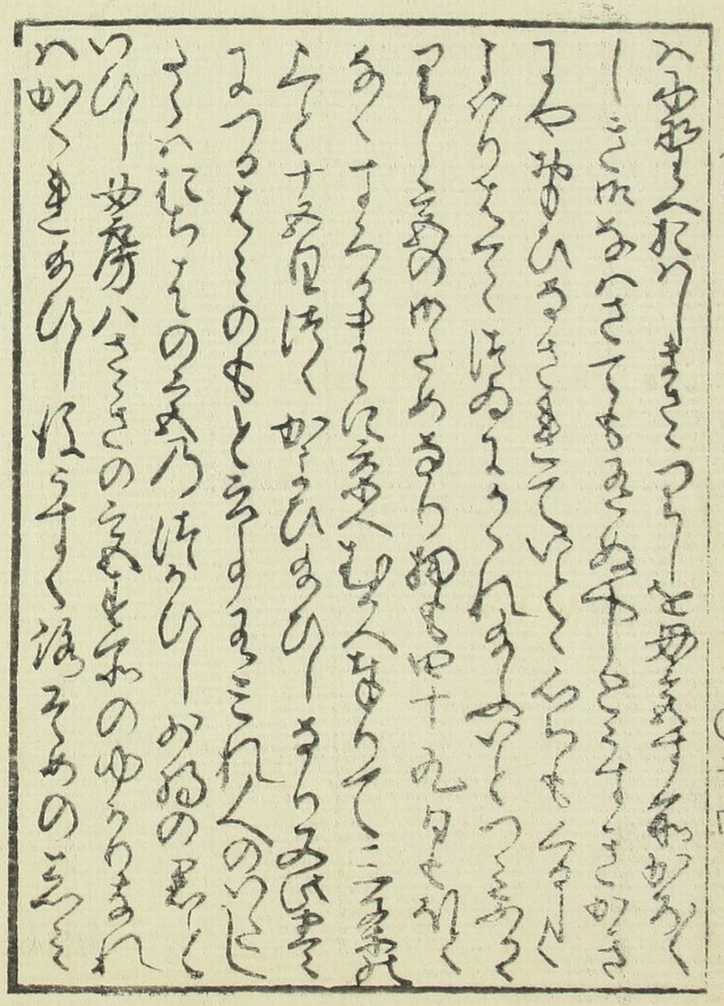


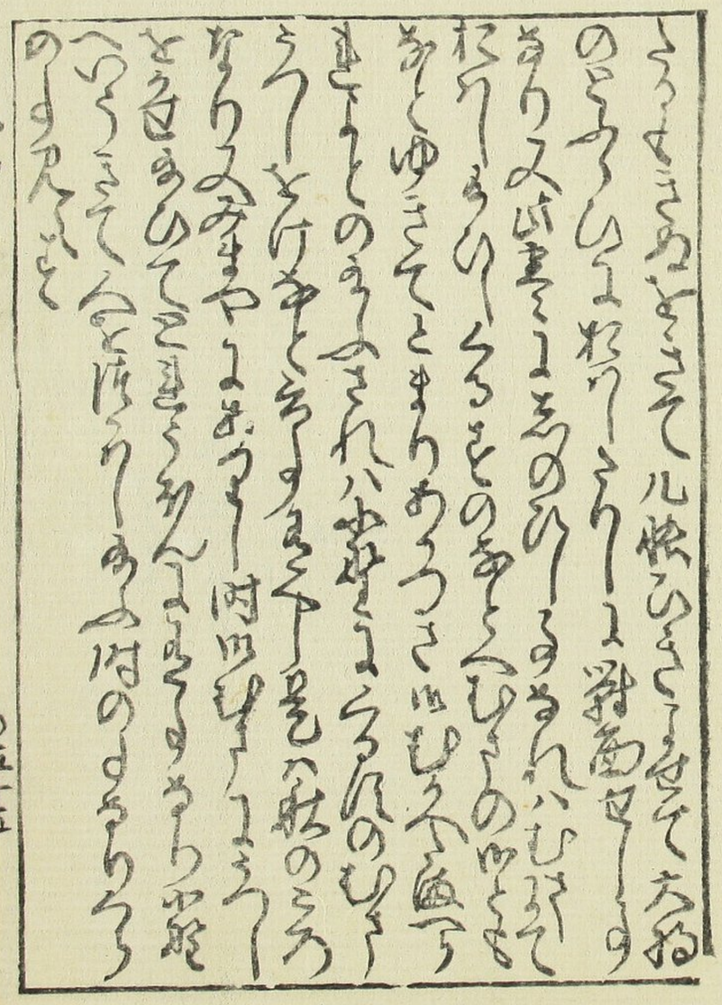
一十三











二十四　洋法の

世をみのりとゝのひぬるこゝろかな
うゑて幸ひ多数のわけまへの名うゝり
ゆくさきあり〳〵ゑあり〳〵のきやくたち
ありがたつとし

[illegible]

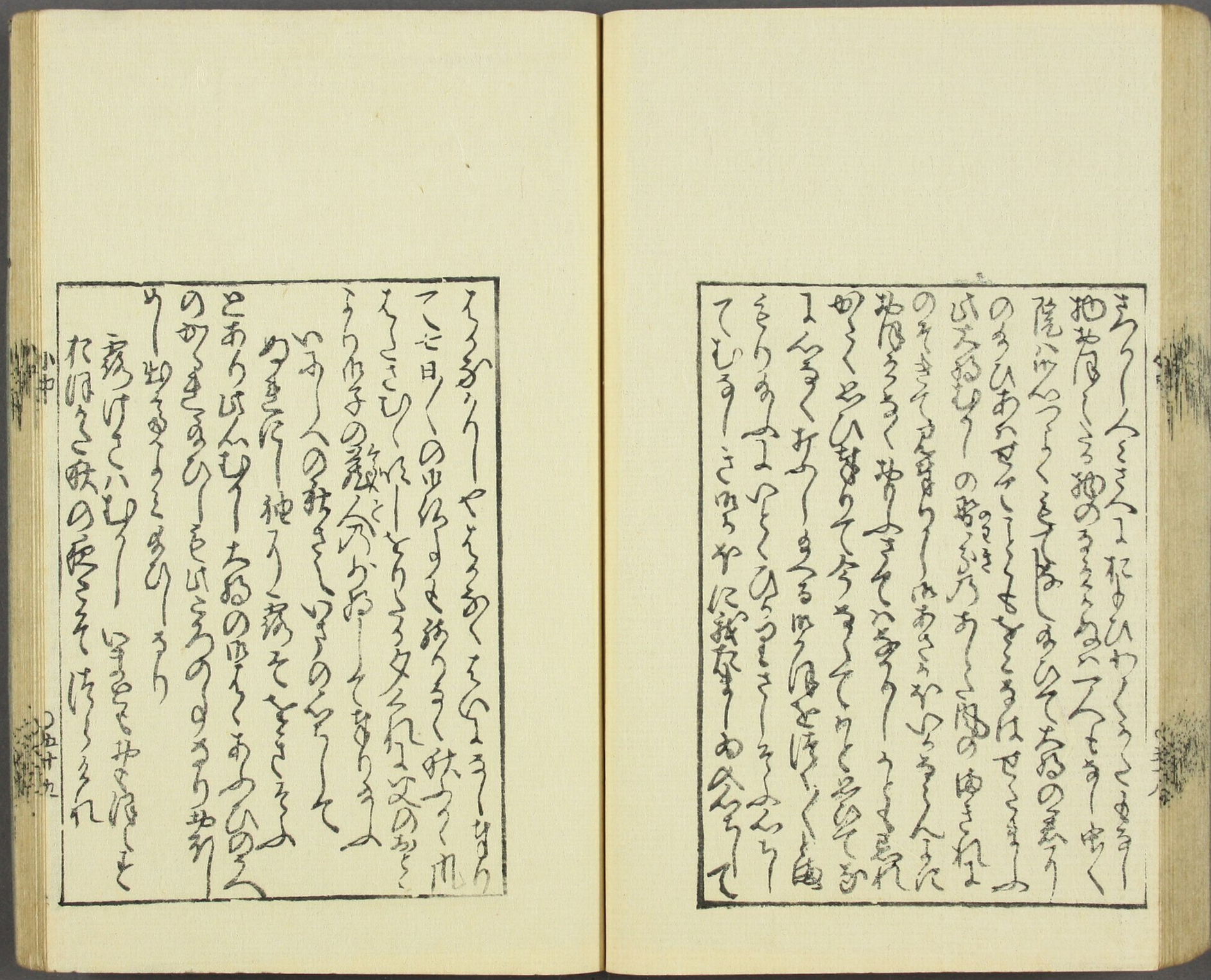
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

中務の君

[illegible]

[illegible]

日[illegible]

つ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

七月七日[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
と中ねの太れあつきこゝろ[illegible]
しくるゝ心のあ中さゝそ[illegible]
日よハりさゝめ月九
[illegible]
[illegible]の月よハ大[illegible]
きゝ[illegible]
[illegible]
あらよハ人[illegible]
[illegible]
[illegible]

人さゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

まさあつめひさゆのてうきろけうろくて
こまうにうきまうろうさいてかし　徳年こさ
れてうさ付てみかの屋ろ世ろてこえうり
ゝさつてろてみるもかひろしかまえ
なるしこまけのうりさ流るれ
さうくるひゝゆんの中ゝひ屋るこもロん
うこもあうりしをさ殺のひうり踊ひて祈
らまろ人とにさうそハゆさうんとみか
人さ世ひ寿ひてさて四てこもうりれ
ゝろうひ寿ひ人ゝ寿ひゝうりてさひ
こもうりうさこうゝ穴れこして四穴

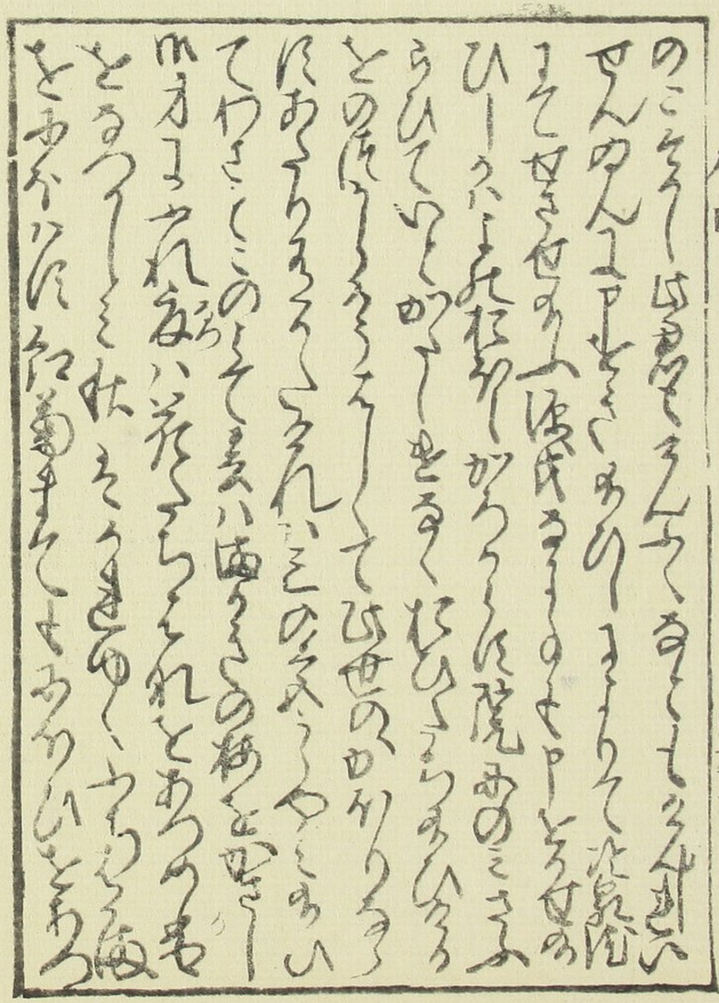
そこうこあてこうたこりのロすこもれひ
出るゆこも人屋のろへこうりそあ流ひ
たしあゝひうしもろろうゝ流ハうろうう
こもあうきろれさやこしこ保まそ世
うりそうゝさゝくのうとれうこさゆこ
寿ひうりうるうしあうこさ屋こうひゝ
こうろうるうこうろうこうこうこうこ
行ひうこうこうん世うりうろんこうのこ
こまここ寿ハあゝひこひこ世こうこうこ
うゝうゝうゝ四神のうゝこうこうこうこ

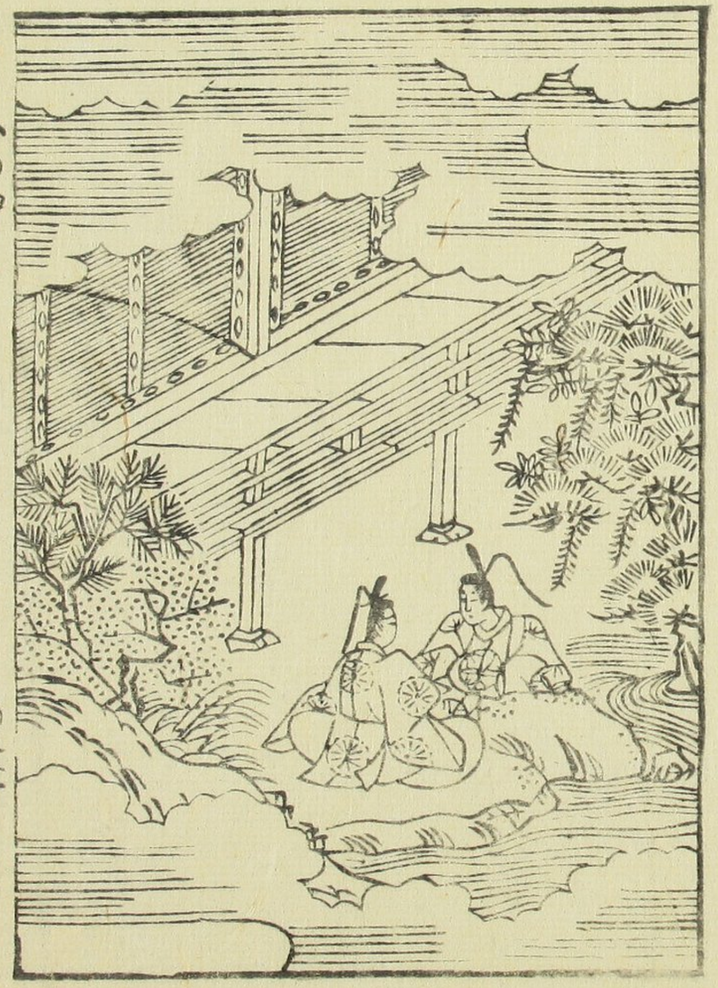
ものたちてはうこと思ふこころひとつ
くの物さくふ世ろくこころやはしたれ
とろうきやうしかりとしいろと化りろ
ゆきさしこさろきろうろうてはいかひあ
つろうを思うちいとくえんあうろう
そうしこさろうさの浜めてこあら
るはこさ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

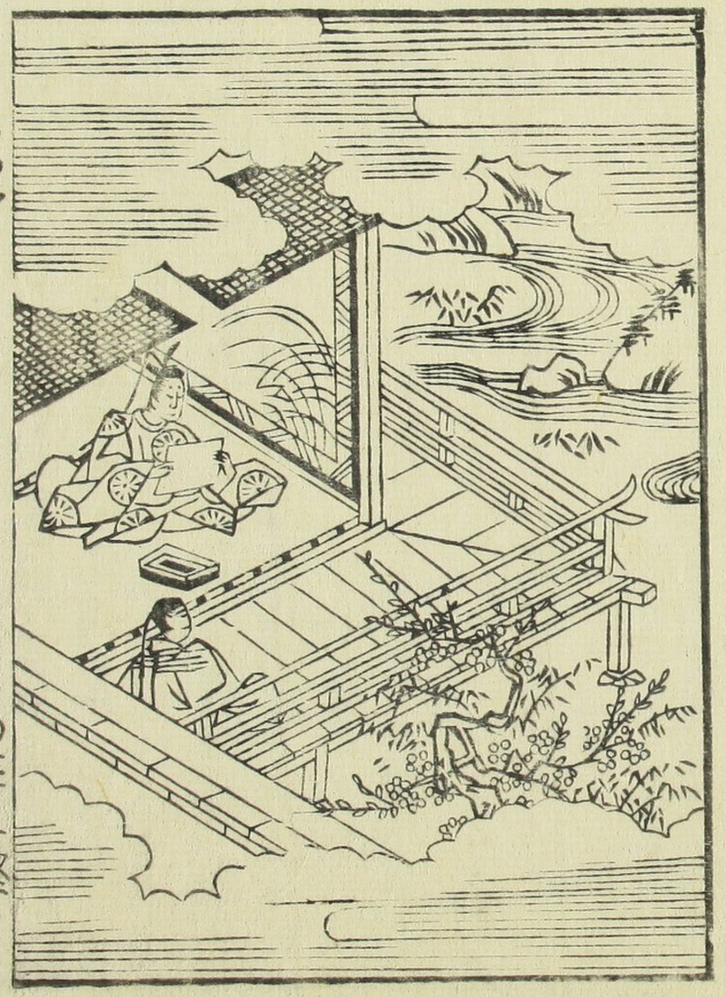
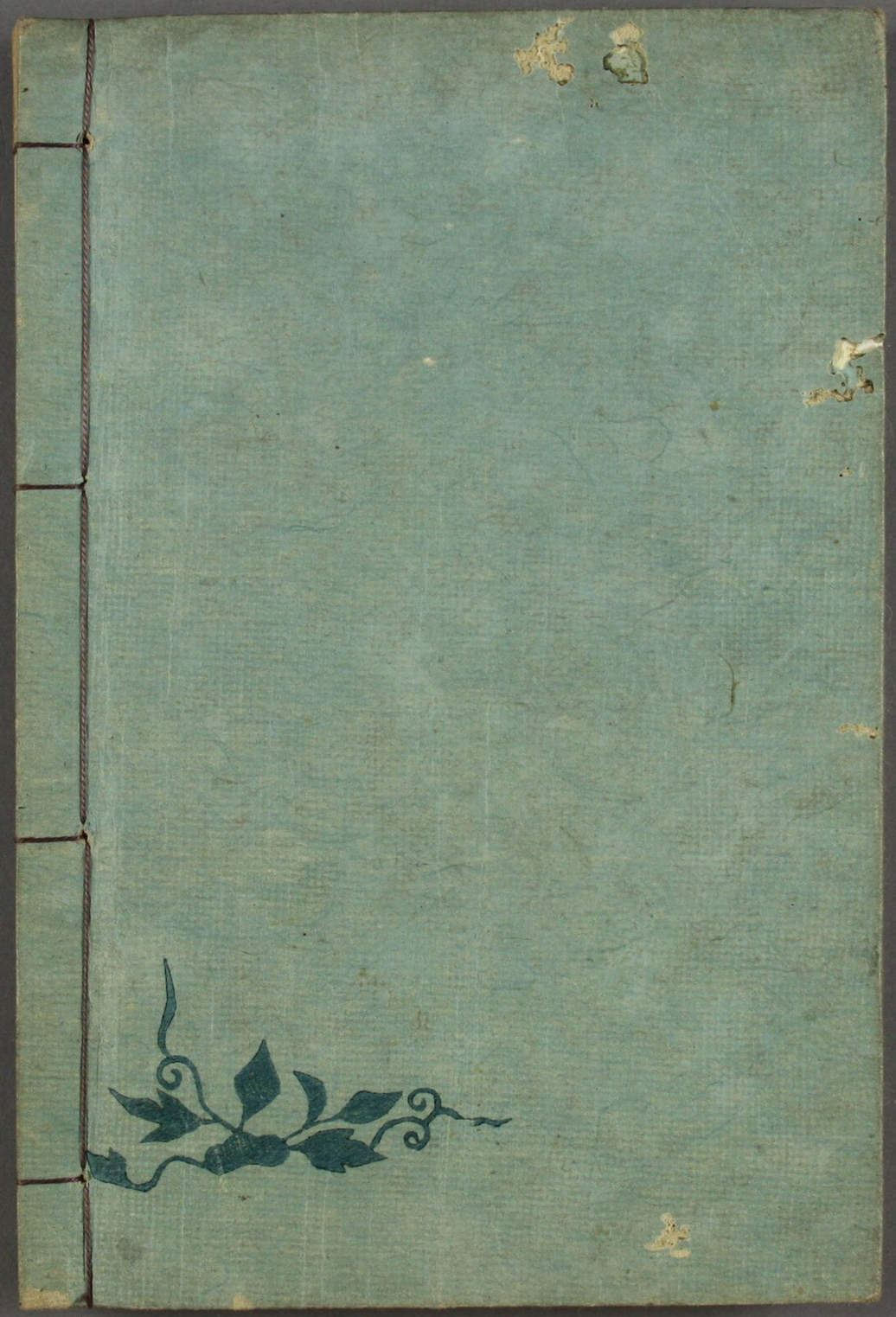




又ひとりの女房ときこえしは
のぶさとの姫君とかたらひて
ふたりさしむかひてあるかたちこそ
ものしけれとてそのことを
奏しかねたるけしきにて
其のかたちをみるに
なをとりかへしたるこゝろ
地
うらめしん

其のうちまけ
まけうへ

つゝて母の尼君のゆるしをえて四の君
をのぶさとの姫君にまいらせ給ふ

紅梅

はるかにこゝろをかけたりしかの
ものがたりのこゝろをもてあそ
ばんとて
はるかにこゝろをかけたりしかの
ものがたりのこゝろをもてあそ
ばんとて